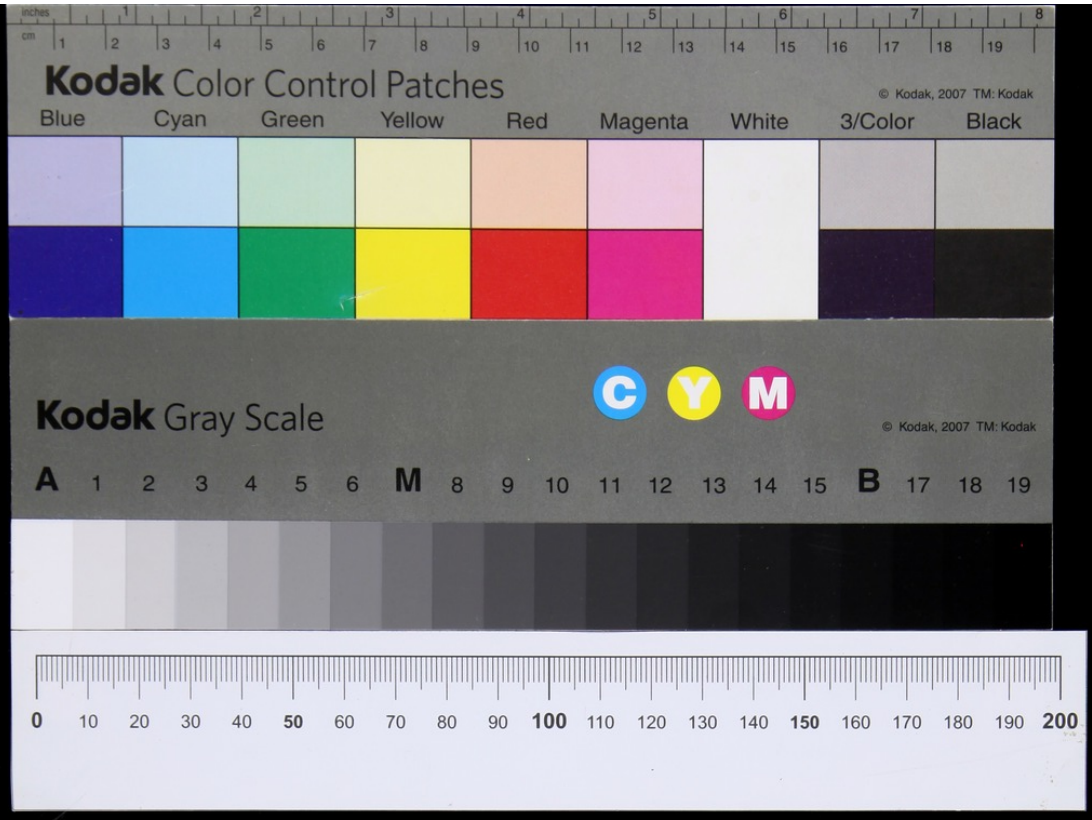
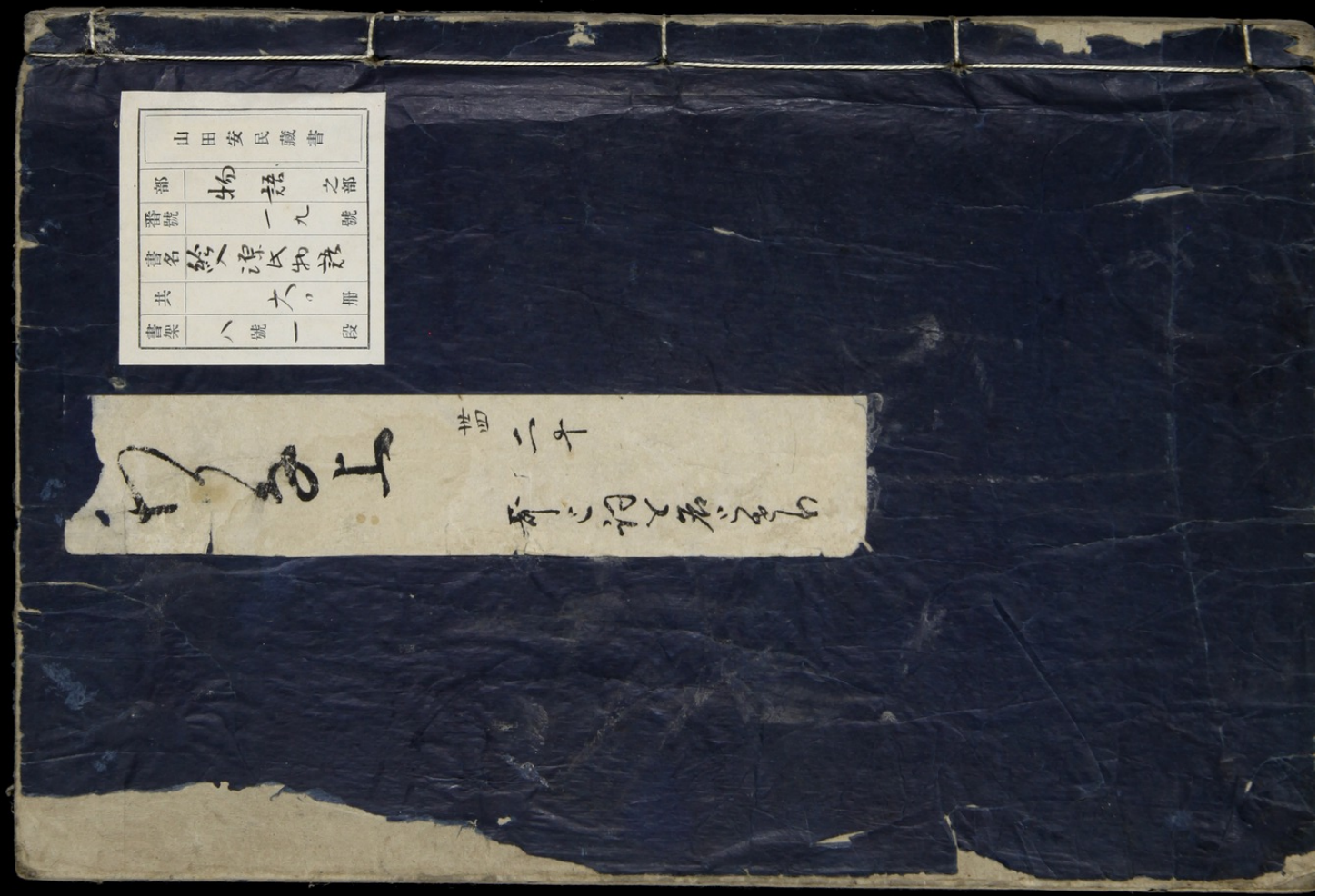
# 絵入源氏物語

## 巻三十四　わかな上

椙山女学園大学デジタルライブラリー

椙山女学園大学図書館


Kodak Color Control Patches
© Kodak, 2007 TM: Kodak
Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black
Kodak Gray Scale
© Kodak, 2007 TM: Kodak
A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19
0 10 20 30 40 50 60 70 80 90 100 110 120 130 140 150 160 170 180 190 200


山田安民藏書
部 物語之部
番號 一九號
書名 絵入源氏物語
共 六冊
書架 八號 一段

絵入源氏物語　三十四巻

源氏物語玉の小櫛 巻之十二上二

蓬左文庫蔵書

朱雀院のれ門おりしもゆきの後なれば
何もかもかもやうにつくりなしてあはれ
なりまさるにつけてもいはむかたなくおぼし
めされて手ぶりもことなるひのあるさまを（表紙のやうなる紙をいふ）
家のおりもつかはしたるにかきつけてさし
そのかみはかくてやみなんとおもひしを
まづさしもおもはぬ（女三の宮の源氏をとしたまへる）
中に（ほんぶ）先帝の御ことをおもひ

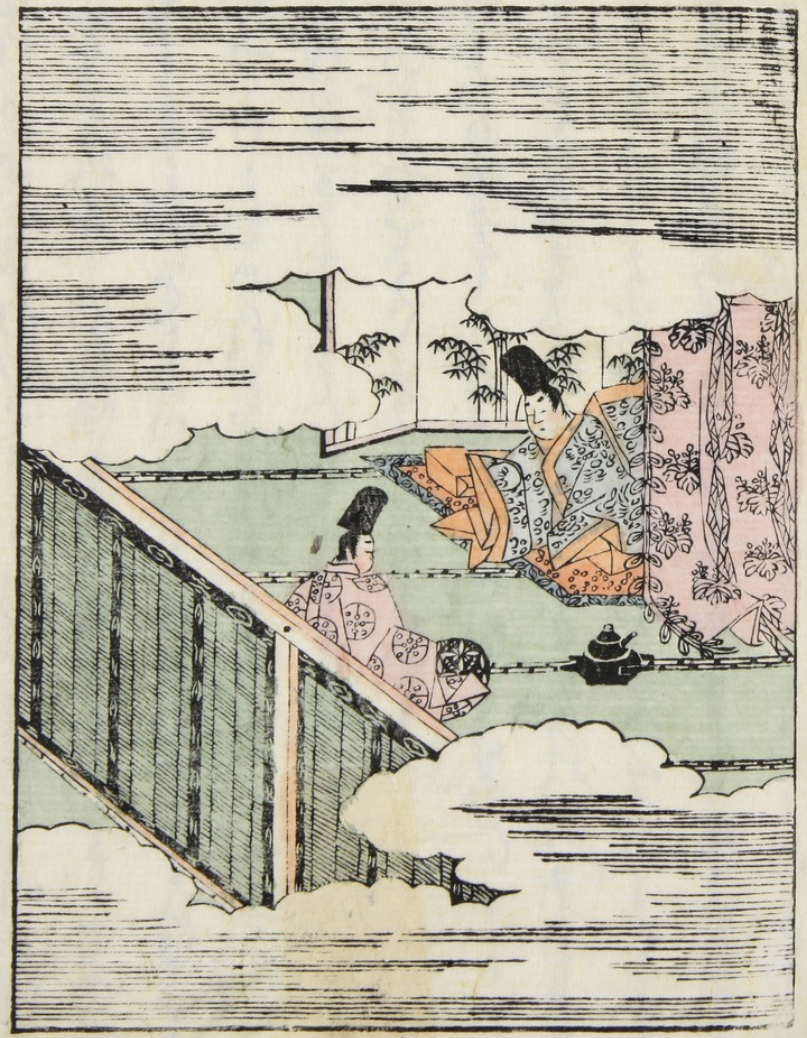
なつまろ（朱雀ノ帝）ときこえしせうとの
こりのそ（弘徽殿ノ女御）ねたまふさまいとおそろしう
ひとえにうしろみきこえんもなつかしきほど
ともそのすぢならず（源氏ノ君）おもふやうなる更衣（桐壺ノ）
はしたれ（桐壺ノ）ばかりのひとのほどもこころばせ
太后（弘徽殿ノ女御）の（勝月）御おぼえのことをまつことをそまうけ
うつくしきこ（源氏ノ君）ども（朱雀）ひとりふたりうみそへ
けるをいとくちおしう（源氏ノ君）おもほしたり
やまごもりのこころもなぐさむやとて
ときどきのまいりたまふをもいとしげう
ばかりおぼしたるに（源氏ノ君）よのなかをうらめしう
やうやう（源氏ノ君）おもほしなりぬるこのおんこと
の中にもとりわきてこころにかけきこえ
たまへるをいとうしとおぼしたり
ときこえしおんかたちありさまのおとなび
ゆくままにいとあはれにかたじけなきまで
（朱雀ノ帝）みかどのおぼしたるにつけてもいとど
よのなかをおもひしみたまひて
（朱雀ノ帝）みかどもこのきさきをばことにおもほしたり
（仁和寺ノ）にしの山（朱雀ノ帝）のおりさせたまひてのちもいとど
ひめぎみをのみかしづきたまへばこのおんこと
をぞいとかなしうしたまひける
（女三ノ宮）このおんのれうにとてもとりわきたる
うちやむごとなくおぼしたれどうちまかせ
てはえ（源氏ノ君）ゆるしたまはざりけるをいとど
すずろにゆかしうおぼしわたりけるに

つくしてまつりをはてて、そのつぎつぎをはんごと
にことごとくいれそうづむごともおりけり。玄文そ
うろれもやそよそへて、(紫)紙そむうをそうべさ
れにろづひとりはんとそうをはてて、つぎつぎ物
のへうに、(兼香歌)女れもろひにそしさをはてて、さいり治
へりずれそうれもの(玄文)ほしまもあいざりしうど
家(玄文)のつくておりまするすくさのうぐりをくめで
それば(紫)ごろのれ物紙こまやうそそしうを
そ治そり、玄文もろびのくようをそもち治はん
れ心ごひるどそそしもつ治れ(玄文)そうのほぐよ
をしいとうくやそもびさをはてれうもろこれも

うるるそろぐーうめるーひとりまよ
ーうまへぶとうそろやすくもそそしさを治び(紫)同
世ようにそのろうこともはず、お文そうのあるも
のろうにまりもうそをそへやるはん汁こめこ
れもはぐーりめべうけうさぐひとれ
うへよそそしまもおいそろうはうるあを
あはすくへおそうのうすくをあるはん
いとはおくるさいづれをもそやうるはん
(玄文)れ世はさ面ぐうつけてれ心(え)めてばし
そづよそのはようそろそちぐおうしそろる
まもゆづり治り三文(女三)はんうそけるよそて

おもてぶせをもおこして給はらのぐらうれしくおもん
てのおそのぐり幸の後いつまでへのことをうそへて
ゆくゑうるくおもんはぶしのみこうめんよ男
ぐることどもゆりうるずこぐうくひもの
しうまうべきうしおもしゃへもどうち
ふれつつのおりす中納云のたすさゆりうるん
うるいどをくくもおもまうへつきごうくゆりうそ
まうへゆて御やけもつうまうりゆおいつぐ
世中のことをうるまへまりありくほどよいだふの
ことをつけてもうちくのうべきものごうりるどの
ひいそまもうまへのうれうることありてもん

おどうう(浮)すめやうるくおりうしゆくぐもん(浮)うく
御やけのれうをうをうまうりうそて(浮)ゆぐ
うまうひをうまへんとひとへそこもるまおし
のちいおうよごくをもちめやうそて御(桐つが)院のれ迷(ゆくゑ)云の
ことをえうまうまうず(朱ノ欠)れ位よおうしまうまうし世
うは(浮)ううひのほどもおうのうう給もとこぐず(浮)
うううこの人くゆるうて(朱ノ)その心ざしをもげて(浮)れ
らんぐうることもるうう今(朱ノ)うくまうりごう浅
うりて(浮)ゆぐうおいうまうすれほへ心(浮)のうちをも(そ)陳
ゆくまうりうけうまゆしうをさすぐうり
ゆよとうるこ命をうさ男のうそほひうて(浮)をのぐう



月日をすごしそこなんありくらべてやう
ねど養(こう)一ぱ二十(たり)よもまでよべうるほどもれど
いとうくく のひすでて うちもうるまに
ほひて いつそでくそのうちをいれめよとぶめて
うちまもるを始つぐれもてわづらふ娘(女三)家の
れうろうろそれをやもどひとそれまでうて
うちとうる

朱引
ねぎさなどのつらつら。いまはすこしのうれ
しうされ。ごごろ心えめさ侮よさしーがいつく
もりーをーやすさ物うーすずるねるくく
ちふくくそあれと。の給ふなるそーそをべうな
の給うすることよく。おやしくやひめぐーする。
山ひめ女三やとくそーあうこいて。さうべさひと
あくぶめづくて。こころやすくせをもなひそをれ
なやくちん。そーの給うすると。をれびうありも
さくのふさうありうれぐさやうのすぐうやとは
さひうれど。おとこころえぐかまをはうそうへ人
そうしさちんぐ。朱引くくもはうしは

うべきうくのこちんとどうそうくして
やこめ。かなもどいのぞくて。いとき延くを
こと給うくこうういうれ。おるめでこるぐあうもりて
アゆうを。かいちくへうい。いでさりとを。れ院(保)のも
うりまおしをーれありさ侮うは。えうずくへ写し
給いぐり。いとめもあやまこそくこうまれし給
しうれと。いひさろふをこころめて。行まくと
(ほ)うれいいとさ侮こくおりーへでうーいまは。まる
給うまもわびまりて。ひうとはれをうべき
一やとこゆうまはひおん。いとぐくろくこまるか。
うういぐちてもうぐーしをうさうれぞ。

いかでくおぢやうのめをとうでぬきすてを、え
うちとりてこゝろみれどもつひにぬけあそばず、
そのことよりていよ〳〵おぢやういこさ
るゝことくうつくしきことのかぎりなるこゝろ
ありてされおぢやうもこゝろよくもてなし
ぐるる人のこゝろ有り、そのうちよりひいて、
（ひつぱり帯）ていきうのうえにうつくしきもの、さげ、
うちでうづき、男ようへてそこらうどう
心のまゝにもてこゝろひとつ（そちら）（ふところ）ぬ云
こもるこゝろ、ひとつありてや、掌おうて
大ねうのうえにそれもつくこゝろ
すこゝろのまゝにうづきのてのおぢやうの
めりこゝろこゝろのこゝろのこえ心もちね
ちどいふれもおもうくをとうまゝくおやまうてゝも
おうすけまうりうりおぢやうこゝろありおぢ
りでさうな、ひめ（まゝ）やのつうけうづきて、うつく
ちよ心ちされ貴様ちうをこゝろ（まゝ）まうり給ふも、兄（汚）
こやこりうけいまうくおひちうこくをど、
そうくこゝろへ男けいべうこんひとのうちろやも
うこんよおづけこゝろしどやうど男し給ふもうこ
ゝれめれどもめこゝろ（ケシノ）れもさの行のこゝろうどの給
こゝうつでよ六条（源）のおうぐの君うのそこ

ひすめ。おほーしそてくんやうよ。このきやをあげ
りてもぐーまん人まぢれ。ご人のあるこいあるこ
ぐこ。関る片中(秘鈔)家さあーこひ拾川ぎくのあ川建
そても。いとやんごとあるさうざりまれもこるこ。
もうぐこさうもろこあるこて。さやうのうごらひ
いとあうくあるんでの指中(タ)納会の名左のひこり
ありつう程よごうりうすめてこそ心こうべうりれ。
ワうれどいとさやうこくよ。おひささこれまーげ
ある人よぞあるをとの名り寸。中納(ぬとし河タ)会いまこうり
いとまあびこそて。幸びも投(あ)ワこり心をうけて
ほうぶ海よさひうりうべくも待ーぐりけこ。

その心ひうひてい。いとぐゆうぐくる待うぐ。
み院(保)こそ中くる祇いうるこうけても人をを
ゆーくあばーる心いこぶまれをも名もれ。
その中こもやむぐくるされ移(ぴ)みくて。恭(見)
敬院(さいめん摸)ぐをも。いまこワこれぐくこそこて名
あれとーもそ。いそのうりをめあぐりてそい。いと
こうろうされそれの名りすれぐ。ばよおまうろ乃
るこまうづこひて。めぐ海(保寿ぐう)ーうべきおもれも
ありうも。ちをやぐておやぐ海よぶろうて。
さもやゆづりをさ学てまーるぐも学ーく今
べし。年河(まこくよすこーもうぐこそあこんとさん

女ぼうこうがおるがくへみえ人(保)へのおうりょうそへ
みれぐをまぼしくれいくぐるれこのよれ
おひざいさぐうり心ゆくおりさ後まてそそ。すぐ
さ後はしくれ(朱)れなおるうがなおるぐうううおり
とをうるずむつびようるまし。つうまし時おぐ
さるんおぼしくしまして女のおぎむうれんハいと
とりぐやとの給りきて。れ(也)心のうち(脇)よ。むの
売のれともそうまうべし。このれうしろうこ
どもれおるよ。ともくしうれめれとをうと。
右中弁おうう。れ(保)院のもうさをうを人まてぐしび
つうまうをうりこのう(之)やまも心うをくまて

さうくへバ(たゆまり)ううまおのて(給)拙ずるけのぐて。
朱うへおんうくれ乳女まてそそて給しをれ
保院よおりおうバ。ぼしまし笑そをゆへこそうそ
ひそりかうしまう寺そバ例のくとるれぐ。後
後まつけてうろうをそまうり。行ぐうつけ
てもれうもろこし給人おうバ。れまし。げうる。
朱うへを亜(とき)そまうりて。まるまごろよび笑のべき
ひともつけれバをのれいうまうそそもおるよ
ぐうりの女づへよゃおうん。つぐ心ひとろうしも
おうぞ。をのづくびのお(か)のくもおうしまし。
うぐうさ笑もおうんとそそは。いうさ後う

えはづかしうこんのきみ（源氏）のゝこんずるよしをもうくも
このれいとくさぐさまうしつゝうまつりようくもんの
おろべきうへさすがとゝめあれど、さんなかいつと
すくをさぐめづくなりまさ抱もれがうるばかり
るげしくづくあるるのれ中よ（女三と）ざりつきてゝ
きをおまつひても、人のそねこあべきあるをゝぞ
ちりもすへをまじとうるふよ。弁（左中弁河）いうなうべき
れこまうあるん院（ほ）いおやしきまでれ心ちなく、
うまてもこゝめのみるへいれうろまうまうろ
をもゝ文さしもあうこざりけるをまくぐり
つけて和さりのひて、おまるいぐへ笑れど、
やむごとなくはばしうろいうぞりありて、ひとうる（宮の）
あるれがそれまこうろてゝひうるびあるすまるお
もおるるぐこそいおあるをれ（女三ノ）すくをありて、
ましやうまなりまさやうもあうぐいこぐさ
人（宮）と笑あるとも、こちうこびてゝなしうちのみこと
えおしぐとうこそれをしうこうれど、れいうぐと、ぐう
あるくことありてるんおばゆう、うろれうへ
ろの世ますぐて、ま心まとるうこといるう紙、
おのすぐうてるん、人のまぐうをもおひ、ワが心うも
あるあこともおうとるん、てまようろくのすうひ
ぐまもおばしの給（ほ）ノうまばしのれうぐこ

そまろうまおろうんなりてまおろうぐてり
つけてれげよくしめへるへれそへるず
ろうろうれろうさいまおりおりなどうぐりあう
くへどをて院(ほ)のれありう面よおろうべきそて
ぐてろやいなくみすあうそれよおあるぐうはげよ
きこおりてまろさびいうまさびひろうれあろへな
らんとろろふをめれとまることのいりぞて
ろうくるんろまよがしの私(わたくし)をはのめうしおり
しがれ院(ほ)よいうるずうけひさよりさを治て
んろびのれはいうひてはしめべきくく
うをろるのれはゆうしまろまおりめべくん

つへさえんとうんりおりをいうるべきこと
ろこれゆうんほどくこつけてひれをたくれ
ばしつきまへつおろされ心ざ面ろまれしお治
あれどろくへどまひさよへろうるろびひ
ろることへへのあるねこうおめるをえざ面しさ
くまやゆうんれ(廿三ノ)うしろのぞう治へざいおまる
地も治めりようくばしめしさぶてそそうくゆう
めうざうるさへとまゆれどいまれせれやうとてい
これはざうまあうべうく世中をれ心とすべ
あけべきもおりしますべあうをひ(廿三)めやいあさ
まくばつろく心作(り)うのそそうさを治る。

ぐさわざされだろうじょうろめろくなんぞ
でありくもろくべさ人のろろゆり
しどころろまて世中をすべすべすくを
ろて後のようおろろ人あるろもろうじろのやや
もちろいるぐありてそよるさいいあると
やすさことろるおりかくてしもあろろ
ぎりろとこれどおをろちもおとかそつけ
る程いおやようれぞろべさ人もゆるめる
ろろづろのまびわざろうでろるんかのまよい
ろろろろ記そぐおばゆるわざるちをくべさ
ろ人のなろしそぐよおろつけく心づさらさ

ろるり分づろのこりもれて分べそよよ
わめを物よ心りりる人ももえすくをの
程さぶめれんいとろぐしく分のまて
るりありそ後やてもろろろとるをおやろく
共ろるろろろ後よやとこれさ後
るをこれ(ゆけくろのつ)れの心ようそてるろろあり
あうるろくのようまりいぞんとういうさ
ろおりそど(池)すてそまり給んのちの後
うろろめんぐろひ実さをめれど(ゆくよ)いよく
まづろくやひのへり(朱消)いますろりまた(共ノ)なをもろ
ろり後ほどまでぐさんとそいろろねん

ふつうをいうさはいもとげざるものの
するよどのまよはされてうん。それ六条のおとゞ
げよりともをのこころそ。うちやすきうさい
そよりちんをうべくありまさもれきる
べさんどをうべくもあらずとてもう
てもんの心うるのどうおもそおはるる
れありごとうちやすきうさいおるく地
をうるんなるうさぐろしうべきひとうれ
ぐうたあうん。ぎうえんどうやすうし。
おすぐまぢうそ。よんとつうまんおうしむべさ
えたあれぐおうりうくうるべうしめぐなど。

ともきうるをうれて。すうしうびうなばうや
すうこうんんいうさんもつくうれもしげもう
ちんのうまるお納言の教任の家つうさのぞむおる
うるうこもれまめやうるべさくうりいあ
れぐ。さすぐよつうぞや。さやうをしるべう
うけすおをめぐ面しくうんあるべさむうしもう
やうるうこひよいぐぼまんよるあるおぼ
あるよ。くうりてそありうれふひとんまる
るくもちおんうるぐうりをぐこうさうるおひ
さぶめんいぐあぼうちおしうるべさわぐる
ちん。左衛門佐（柏木）のうくうよわぐるう。関伯（勝）佐のもの

それ、その人（柏）ぞうるん、ぞうねるど今ぞそて
始めてをぼえまうりかがうぞ仕ぞそうりぬ
べき後まぞうつとわくむげようべうるほど
ありぞうるやぞうてやまめずそそてぞうて、
いくそづまりぞおぞれるぞうきひとまいめけて、
ざえるどるぞまるぞうまいうみうぞえと
るべき人るれがゆくすぞるそれまそれどるぞえ
このめそとそひそえんまいうぞうぞあるやと、
ろげまおぼしをひうり（地）やうまおぼし
うめおの文そうをばけてもまやまをめ
人まるおやうくうちくまの始うまるれさ

うぞどぞまれをのづそとひろごうて心をつく
そ人ぞ（柏）うりうりおぼきおもぐまお。この（柏）湯つ始乃
今までひとりのぞありて、ぞうちるぞばへえで
どさえるをうるれそぶめをものでそるるありる。
やうまもをまむけてまうりてめをれ
そんばいうぞうりわぐるめまもめんばくありて、
うれをんそ（柳）の始て（関）伯のんのきそ
まいうれおのの小（ほそ）のぐそてつえ戸始うりうり。
ろげうぞうるろ云の紫をつくてそうちそせ、
れぐをそ始わをそ始（等）答ろ安いた（ひだ）ちおのの小（むづ）のぐを
まてうづをて（むの）ぞうそ始をんぞうもありうそ

すちよむつびをれ字とんことといふと中こにようち
つごさ・ようをさそんそごさこはごてくく・ゆりくの
ふあよもおさくめはごてこをんあるべさ・中納云タ
ちどいさてつくくくくやうなれど・も
ささとをて・人ごもつあよやけのれうろろさ
ともめめぐさおひささあれがさもそくようんよ。
ちどうこそあるくん・それどといくくまめごちて・
やふ人さぶまりてそでめれがそれよそごうこを
まふやあくんなどののて・ゆつくいはばし
もをれくうさ侍あるを・弁いはばろけのれさぶめ
よもあくめをうくのるまへいとあくをうち



おりうをものて・うちくよそくこちようう面
ちどくそくく字めれいさすごおおをつ・いと羽
うちくくちをり給ここあれいおなごちよ・ふく
さくるもりそれのるごりもふうさありうくお・
さごうちよこそなり給いめやんごちるさまふの
人ごおりすとしふことというくあるさこちりそれよ
さうちべさくよもあくず・ちくずさうとてすお
の人をろうちやうもる・桐帝院のれ時よ・大后宮
ちうのそごめれ女れうて・いさまさ給くうど・
むげのすおよまりのへり・へ名・安よおごくを
をそれ給ようく・このそこの・れ女女れうそそ・み

我のうへ地どもはほくもせきう云条院うもゝ
ゝゝゝ



心もつくろうをわんじゐ（わんじゐ）おうて、
このゐのそぎもてめれば三日ろうて、つおよれば
おろ〳〵給（比）ろもさ程の人のうへうそぶよいまは
とそさ面ろろいうろうげろうわざおれいまして
いと表げよ此方ぐもおばしまどふ間（物）治のうむ志
志いつくまひろて、いろぐくおばしいりうを、
（志）うへうめろて、なをみろいうぞりありうりうく
物（ノ）のまひまこのへる別（れ）の、うへぐくをあるれとて、
此心ぐれめべくれど、おちぐちよれけうろくう
うろのて、山の座（ざ）をうろぐめて、ゐいむこくのあ
うろ人へまこのて、ほうぐちぐ事行ば世

別のみぎりさぶらひて、そのほどをこひすまひつゝ修造ありとて、洞もえこぶめつべきまでおぼえしかば、更衣、こゝの男をんなかゞこをゆすりこゝろてまさぐりむいしく心おそくこゝろうらでもおぼやもろ有るやでこまべくこゝのうけこゝろいさゞひてをばゝめこゝろもあでこのおさおさこゝろよひゝされてとそゝの給ふ。間ようはなりてれこゝひのこゝびさいこゝこゝや六条院を、すこゝれ心こゝろこゝとこゝをもて、まのみれさうぎりのこゝふあでこゝそ、これおるでごほりおりおのなどくこゝこゝまりのこれやまこゝくまゐぎ。

天皇の儀式というけぎり給ひぜ、それもてあそびこゝろ面もでい心こゝもれどこゝとこゝろそぎみて、御のこゝくこゝろめれ車ようそまりて、上達ありでこゝろべきこゝぎり車よりてそつこゝまりりみへる院ようにいこゝでく物怪びこゝそこゝさせのそでぐあこゝされこゝちをばゝつゝりてれ對面ありうりこゝさ面ありず、こぶおりつゝまりすこゝようおまりこゝうそひこゝろこゝへてれまりのふこゝりみへる此頁給ほりさまり給ふこゝろもさ紀こゝさられてこゝうゝくこぶめぐこゝくおばこゝれぶこゝこゝりをえこゝろあこゝひ給ぶお院（河桐帝）ようをこれまりゝ此ほひこゝうよれて

うちろめたくこそ侍れ。まことはあはれ
なることを心(こゝろ)にとゞめてまつり給はれこゝろの
うちもさすがにゆるされおもほさるゝ
すぢいでくるやうにて侍(はべ)るよりをりふし
げうわざもあんなり給けり。まめやかに
いとうしろさすがのまうけのさまとおぼえ
ものこゝろぼそくあはれなるやうにて
ゆくさきのこと(後)ぞおぼつかなき。

十三十六

侍(はべ)るに限(かぎ)りあれば。やがてとまりぬるひとよれきうり
ごとにこゝろよりほかにあひおもはれ
あるおとゞのけぢかうなれ心をおくべき
よもあらざりけり。すべてかのあるまじく
まことのれうにこゝろことすべきもれいをうべき
すぢよりをりをりえさしもめことなもぢを
こゝろにもまもりめ侍(はべ)るんこゝろやすうべき
こゝろ侍(はべ)るをおほかたのちのよれいうしろがひ
のこるべくいろいろさよおぼしえこゝろにて
きうべきれいのづりをこゝろをものべきうよあるん
侍(はべ)るとぞ。養(やう)子給(たまふ)来(き)ゝやうのこゝろ侍(はべ)れど。

それもうちとけごとなんをけうぶつうへのみあ
そそて作りよも。世をそまもつそうのごとうごと。
人をそこのてさうさ面のことをしーうへくへ
ぬりうり。まってく今りとこの世をもちあ
そ見ておてごとくさくさうべそまもあるのど。まさ
志うするの中よも。特ごとさことあうてさ面ごく
さひいづこの作ほどよ。やまひをもりゆくべうり
うへすべきことあるの相日のるゆけが心おいうく
さくちん。そうくいくさゆづりれど。このいそけ
ありき関就(芝ちんク)ひとう(う)もけそてもごてこそそてさう
ごさうなもれ心よぬしーふめてあづけうへ
と字まほもそ代特中納言などのひとう地しつ
程よ。ずそうべくそあうれ。(れ)ぬ(ぬ)はいまうちぐさ
そよちんぎこれて。ねくぬし作りとさそし治。
保司(ク)中納言(ノ)紀長。まあやうそさもいくくけうう
まうりめべく作りを。作ぶもまるおうくて。ぬごり
すくるくそ作りあ。そごけるくとともあうを心
まそ。うそろこそこしさを作しんこ。おそしーまれ
ぴるそうそてへぬ(ぬ)ぴれごをそごりそ紀(十三ノ)うご
うそ。ううまうりさすさやや作しんと。うそごけ
しさるのそちん。そろぎしく作りべそそ。うけ
ひさよ結つ。和(比)よへめれがあうごの院(き)ぶも。ありう

これより遥かに立ちもこれ前の茅葺きてれおるそのの
精をこそうらど拠りてうつつぞ夢めくくきを
多くり院のれまんをんうつのけどんよれそうち
なぐ昔ようそりてまつうを人で洲をそのびお表
あうすぢのこともあれど。うさこれいりびく秋
みてこうお。課どもつぐよお別南大洲云ど
れをうようりお。あそのの院もんのゆそう
いつぐれ風くそつてそこぐうちやまくく
塔うれど。この多のれこくつしさふ光いるを
そうやすく塔くう。六象院いちまじうてう
うぬぐ塔くぐうむくさのくをうれ
そぐめるぐうのそもはのそうおそれどさくもあく
ど前楼院をもねんびこつしおやうありくど
つぐそくもぐくげずるりをぐそてそ
そうこやあうとともひつしおぐおぐそうを
なくておみそうよつぐりくびこをつこりはは
む我心い家もうそうまぐくこうこくあんこ
つみてい中くのぐおうさこそまそうめこそぐめ
おいざくん祖つこひうぐびおうんなどやすくぐ
塔そう今のうびとぬてい。ましてそうそう隣て
つしおこそうく表あうれ中あればそぐくそうそう
隣おくくそうあくんもいぐさをそれ和そ

ちやすくてあり。治承二の日ゆきうちふり。その
ゆくさき柏原(桓武)にさしこもりぬれのみ物ぐるほしう
き給ふ院(朱雀)のうへのをりはえうちはらはれ
ちりこもりて。哀なるさまのみつくされ女(にょう)この
宮のれいぐうをうけ給(たまわ)りて。おりゐ給ひしかば
んの給ひをけうとくうらめしうて。そのさて
いもひ給ひをことくさくそへいひおもふん
とて。今いまやうのこともうねくしくをしへ給
ひつくせりとうれしく。へづてよろづのことを
聞えとくのがれさせたまへるかんのけいそ。
心ふかさ海よりもふかくのこりなくおぼし



しられ。すくせもくるしうおはしますにや。あるべき
山ごもりのほどにもあらぬ程にて。なくなりたまひ
ぬ。おぢきさきやおぼしさわぐべき。いつしかとく
おりたちもれ。ああうれしうもとうとう。いそぎまゐ
りつかうまつれとおぼしさわぐよ。それにつけて心
ぐるしうあはれもふこともおろかなり。れい
派もくのどかにて。ゆるしきこえ給へりとうち
もさはがすこひごとをぞ。せめ給ふ海よりも
心やすうおぼし海もれ。いづくもおなじとおぼす。
いとつれなくて。哀もふれゆづりこえたまへれ
ば。さすがにいとうき心を重なるべきにもあら
ざ

まことにてあるべし。さるめいわくの心やすくても治るものを。それ（係氏文）女ののれること海うてもうとうとしずおぼーうずまへ。えんやとひぜーと治を。（係刊）おまりうまおとけのふれゆうーと。いうちれだとうろろのくくそあれまことといさぎよおぼーしゆうしてまれも人も心そてるべうまてるまてる治はぢつくく気ちるん。ひぜくぼちぜん人のことのれのみ。すべてれ人のうちといまものちん。さのひせうことをるく。をれづくへ人のちうらひちぜ。うちゆくやさずるうとそくうぜうをを心ひとれまてまびめて。おりう海まちるぜんうさまるさてまいちぜくこひおを治ちん。

治ちるさいうとうさんへ男治心のうちまもうくを（塗ん）ちりのぜさまうやうるうとくて。のれ治うさおうをまくげるもぜちるさび。我心まさぜうりのひいつもちうことちるさびまべる。それがぜうちのうろうとろれうけさうまもおうずをうるべき方ちるさ抱うしおこぜうくちひむすぜーるくう海。世人まちうさてしど。或うて文のお自分（塗ん）（ま）つれうりうけうてげるうことくぜま紙の治出けて。おぜうさお初のれことうてさへおやちくく根（こ）それこ治ちるを。やうまさてて。いうまちぜくこひおを治ちん。

などおつくる人のれうとつくるとて
ごろのうまはるくんいまはうとものを
つぐをこひおぐうるくてるくけうせのびと
つくへるくんことをもるまはそひけばけるへど
いとおつくるのをまてるくまり幸もとりお
事務院まい雅楽寮六条院まうろひ給うんれいつそぎ
そくのふ学生給へうくんぐいとくうちうくみぐ
ありぐうちうもれ心ぐへありて学給けう行よ
うろれうぐめをうろうめてぐぐくまりる
うりぐうろいうくぐそぐる吸給けれぐれ契乃
うまいる月やけるもうろうくすぐうぐ世中のいと
あるまてぐおてうりのぐくをぐこのひびひはく
いあくうろうとい昔よりこのう給もめれ心まてくれ
久へさひ給正月廿三日子の日ありう古大和殿
のお方つれまいり給うれてうろうもまくく給
まぐいとくくぐいぐはくくまりけうれぐ
まはうまてえいうろうへくうろうし給もぐおのびし
れど、さぐうりのれいうはひおれをいうりのふ
修式ぐいとひぐうろうもこのおとくの西の
うろうちのぐくふおまくうろうふ廣間へさろうそぐ
かおうらくくうろひまうくうれうりうくく
いあぐいうてずれぐくう学まいれくとれ

ゐをりすゞろどもうそぶきなつみ(ほ汚)そしりうらみひもころ
うの心ばへなどよろづおもひとゞめわびしうあぢ苦
なるこのわらはともさて置てもろこしの人の
もてあそぶ物とて(むかしもいまも)かはらぬ心ばへをうつしとゞめ
たるふみどもの中に(うち)白氏文集といふ物
のそらにまうけ(たのしみ)をうとくくしくくれ
ものへだてなくまぢかくうちとけ(むつび)ぞへ
うりのひけうなふるまひもえ(え)ならはれ
ぬ老(おい)をわびられてもゆゑなきなどきゝ給(たま)ふ
ときもなくよびまうけ(むかへ)まくしをけさへ
そひてうちひそめる(ひそめる)ころしもの

五十一オ

わらはのべの小松をひきうゑてまもるの岩(いは)れ
せいのうふるれどもをゝてゆくすゑひさ(ひさ)
をしきまゝにて(に)わが(わ)れさへ(え)ふりぬ(ふ)
ることのうらめて
小松(こまつ)ぞとするのゝそひこひれてやのべの
わかれもうしをうぐひす



のみぞんでつきどもあつまりくいつまでも
そこらほどまもなくこれより筆舌院のれうすりのこと
ある限あつまりぎてゐるやうに糸人などいひそ
れ箱(はこ)おほくおほくのそこのくさいとくのへりて
世中よこのれ変(へん)うりえめづらくくをつてす
べきことあくとのものそこぐられうれの恨を
ねてうりばしまうけうられいばいやうう
れおそびありうりぐよをうまよ糸契(ちぎ)りもう忠
おほくの第一(だい)ひとつ結(ゆ)びれることありうりまでも
ど(ず)の心をとぐめてうりばしまうけうられいばいやうう
うくいるぶうれをものへだびよいとおもうりろ
おもうくどとうもぐくひく(拘)ぐよをもどばもいぐぐ
ひうぶうくくそれいあひぶぞうとこうろ
うう表よへぐなぶもいうくべまうぐびてあと
あうまどもそぶまれうもあうこのうへぶでも呼く
ぶよまうべうさあくいあうをそうまうもて
そぶうさあをうすぶできよぶうろびのもれくれと
ものへられうかへまおもうろく。あやしうさ
まぐのぐくうとれをものよゆうう
うりてぶうぐてそくべのぐさおぐあうを
てぞうきるくゆふそれをいうてうう。の

ぼうれのちつてくおつぐやうつきあるかをいつと
うそもいきそしぐりしをとみいそちもねごろき
給琴の声にまなひそなひきなれしことい宣旨殿まんれ地
まて代ごくまに一のみあるしれ琴をとれ院の末つ
ろ二ふ京このこ給ことまて給うりのへりそうをびく
切りのそうしをめうて給うんとすろそ先おとぐの
ド給うりかへるれつそへくをおぼすまとあそれま
昔のことも至てくおぼしいろそもそへちきえ
とぐの給うずれそうきさうりめてそんもおまへ後
きそしさを給まよて表よそうて給うぐ笑のうしきき
地ひうけぐうひさ給まよくしうれど限
うくおもろき表のれ越ちつとさうぐれへぐこん
しまろてそぐれそろこのぐうりぐしまて
へうおまろ表の文りまよまくもそへちきえ
ろうしくそうて男御あそび給行ぐれぐう
の萬響めぐくいそぐくおそうて。そろ
ぐどのそ面まもろきめて振ぐどそやうそくま
まうけれそうう暁うんのそそうう給れを
そうもれぐありそう。う世をすめるやうまて
あうしそすれま。年月のゆくるもそぐおろ
をうううぐへちそそ面へうけるつけてかそろ
ぼそくちんぼぐへ老やまそれとそのひうそ

三日がほどいふ(来)院(法)ふうもおうぢの院(法)ぐるまをいふくめづらかやびをいふう詰(法)ふいのうへもこころみてさだこともはされぬ世の有る海ありげよろづつけてをこよろくへりおとりけることもあるまぢれどもまちぶ人ちくるひのそ(三ノ)るやうなひされよくおかげをくきけこひそういろひのくるよ(笠ノ)ちる海もくちくなばさられどもまちくのをまてなりてれけうのほども(ほく笠ノ)心こころちることをいでめて、いとらうこげちれ有る海をいでくあるぢうとをひこそし詰(三)姫文へばよまぢいとくらうこうる

(笠)ふくものこうちるもいでくけちされうう(三)
して、のさこちよつびのそう(法)れ(笠上のう)
ぢのろうのそうりなう(笠)れと
おていうひありうをこれくいくけちく
のをみしのへばうありまくばをうちまる
こちなどいあるまぢうとくなばとれこいと
あるうものくもちるされる海れとこちり詰三日が
経い我れちくけうう詰をどう(法)ぢろさもちるひ詰
もあこちよ迎ぢれとれれ表ありれでどもちぢ
いくこここうをを詰よれこいおちぢあて飛し
なふこさいこぢくらうこぢよりう(法)おぢて

ろづのことあるそまろこへをいるべてうべそぞ。
あづくしくしくし

あんとさひしうこそおぼゆれ今てのこまてもるゝ
給つゝさうつゝまゝそゝもとうちとけゆくすゑも
ありくてうくせのこゝろをうれのるもあと
のいでくるよさひしうこそおぼゆれ世の常なるあは
らぎうれひ今さらなもろのこゝろにそゝりあり
ぬさゝそつれなくまぎらはしのへんとさうしふ
人ぐもおとゝぢ(人々カ)ものうせやおまへ(女房ノ)もしまゝ
やうれでいづくもれ(出)るのれけさひしふ
くちおしうまへこそとくちおぐこゝろもあれをしこゝろそ
あらぬよけれてもえるう給つゝまくこゝろとそてし
ゐるさまつゝてもやすくめとのあんおもも
なり必ずづくりこゝろぜいぞこゝろもんうしなのぐ
そのぐこゝうちゝらひおぐしげなっを(給ノ折)も
こゝろあやまちよけさひおくしく物給ぐくし給
つゝ我うちまでおりふ(ん)人のこゝろずいひ
こひこゝろもこゝろくはばして(汙)くれくれ
おまこもれしく給めれど(汙)ゝこゝろよひて(汙)いま
めくすれこゝろはまもあらずとめおれて
こゝろぐくしくおぼしうつよこのこゝろ(女三)やをんう
つゝりのへこゝろめやをくれおをつくぐこゝろのうをめ
まやあんとれもむつびこゝてあくまはしこゝ(源氏物語)

あのちくへにてあつき夜よ人ごやとりもすこんと
すこん。ひとつきねおとりご夜あるごや人すこんそこご
ちぢずごろごろもをれづごろのでろりざれ。
ろごげるく心ごろごろされこともあめれむいうで
心をれをごごともんそよあるごのろまへむ中(ゆ)(ゆ)(ゆ)

それも人まいのちごとぐ〳〵ぬるまうでいつもの
おこまりせうそこをきゝてはうちゆるしの
けさひ初やうにてかとともれいのそれをもちて
くるゝふべ〳〵おやしきとやうにんとうちもうで
ろさゝぬもれいよりもうしげるうれしみさをの
声のそこしこうも絶ねうりぐ〳〵つゝとうたひ
おさめどうやうさひこぶれをみけるやうれは
まこゝろ絶ぬうちおどろきをてつゝと心さい
ぐ絶よ鳥のよもうち出をへれど我みさをもよ
ぞがてうりのそさ出のふいとつゝけるをれあり
き絶ぬれいめれどしうちをくまひこうりつまど
もうあけておぢをこゝろのぬくれの光よ雪の光
こゝろてあぼつゝもうしなおまでとまれうれまひ
やこゝはあやちもうと独ごゝろ書ふ前ぐ消ぬうしゝぐ
もうろさ色のおとけぢあこゝしもうれぬ程ありよ
ありをおれうゆさとをのびやうちずさこゝ絶つく
こゝうしうちくさ絶もひさしくうふことを
ありつうもうひよ人ぐもそこれをしめやく
まくをありてひさあげうう



まうでいとちやまうでくなれど心やすさうちとまあこひねうとありがめれとさつしさせこぐりめともちうこぶ(涙)よこそこそしさうこと(涙)なうこととあれ(ら)(函)やとおぼ(ほ)(給)院よこそこーめこんこともいとおー。このごろうりくろもんと(泣)ゑをじえこをおくぬをこはおもひーこととでうーおれこうーとこづこもへつげよ。女(泣ん)君もおひやもちさせ心うもとこうーごり給げ(泣)こは例のやうりおほとのごまりおうこせぬて。文(三)のかた(ほ)よりおこをれ給。こよこづーげもうさ(三)はう(ほ)こ給すれど。此(ほ)ちごひこつくうひてちろさうこう

(ほ)押こち紙へぶうこ程いおけれども心こぶうあこうりをこ梅(こう)のすゑ(地)やどそこいぶーてーちくおいまます。ちろさけでどもをこをて。ゑをまこごうのつ女(なん)まつゆさけはのこ油れうへう。打(ちょう)ちうふをを添(なん)へう。鶯(うぐいす)のいやうう。ちうさ紅梅(こうばい)のすゑようちうさうを袖こそまほへと(詞)ゑをひさくこーて。こをなーおひてうめのへ人ゑさ後。ゑをうこへのおやまて。そうもさうくおとこえ給ぞ。いうう後めーこさけこ後なる。れ(三)へう(ほ)そこ給おうこちをれべいうのて。女(泣)ゑをこをを

墓のうへの松ありさ風ぞ吹紙あるとがくされ
ぬぐるもおもひそくろとおぼえ二枚のかど
あれまをきくおぼつるくいとぐーされ
ろざしのまさうをおどろくおぼゆるん
ござまのでちん院のこうど八月のちよ仁和寺
うれろひあめこの院よ表ちれをうそことも
給ふ女房のいとさしちりまづうくいる
さく有やちどこぶうのふもちくてともうくを
ぐれ心よりてあてちーのべくぐぐびくく
ぬけうされど表ようろめくおさるくおさすう
をひちそしたうり紫のよるもれをそそくよ
ありおさうさん人のそうちうさ風そうけうひ物
すんをつるくおぼーゆうてうーろこのへ
そのみべきおもやおーんとぞ
そむこさうーこの世よのうろゆうそいふやま
うちのほぐーうりれやこをえろうぞ学ゆうも
をこがうーうやとあり。おとぐもこのて表ろは
もうそこをうーこうりこさうしのへとて
よも女房してうそくけさーむさをのて。ちおうを
給ふうりいんぐおぐこさうしまうぼーこれど
ぐくくーく雨白うべさおりのくちうれだ
さぐろをのべて

そむくせのうちろめたくいさりびさしほどし
とろおてけおこそれそおどやまうぞおありし。
女のさうぞくこほそちがえてけをめしれる
ちどのいとめでさせ院のんじておまうどもも
こづげるあるおりよいつけなくてこしおらら
んとぞいと心づくしうばしうり今ハとして女ハ
更衣こちなどをのがこつけれのみも衣ちうこと
ちんおほりけり雨絢のこころハ故こころさいの
家のおりまし二条の家うぞすこおひめ家も
ハれことををそてハれことをちんくうこがちうり
ことどもそしりけりおまうなりちんとおばし
うれどうこをひまけこうやうに心あはあく
しとつあおて、やうく仏のハことちどいそがな
うまふ六条のおとくハ衣ちあずのこおばして、
やこうこれおこうちれべさしろもこがうくいふ
うんおりよ射面あうん今一夜あひこそ、そのれ
こともこうこしまはしくのこおばしつろをうこと
ま世のふこくもそでうりのべさまのほどよいと
おしげるりしせのさはぶちどもおばし学こう
れべうろびよつこうこのひけうをうつのど
やうよ女おて、世中をうひこづまうおうんれはひの
ハ有往、ようくゆしく心許ろけれべおうまじき

あれど、おこりこりこもあれいかもけさ
やうさまりて、ふらつつそいまさる。
ろうへのべさやとおぼしとて、ひとのの
ぶれもりをのうべてろで始ぶ系の
院まするの陸の名の日びうづひて、ひさしく
改けるをおさはじさまぶれうさうねど、
ひとおしそちんひちぶけぶやうまつさんも
びんちさ我のちまをびてとちんさひおう人
まもくとさもちをでと笑まて、いさくさろろ
けさうし始をん伯いさしもさおあろうをおや
しとこのてさひおさを始こもあれど姫文のれ
ことの場いかぶまつすぶおうさのやうは
おうぶそうへぶろ心そひて、こしめやうまそ
おうす、その日いちんぶへも海り始ぶで、れおさう
さし始、さる和ちぶる心をへてさし始ようひ
るて、むつまうし人の限空み人ぶろおぶる事の
音おぶてやつれうそつぶのみおづこのうみ
してれをうそこ笑しおふくつろおりしまし
ろうしさめるさみゆれぶおぶろさのそおやさく
いこやうまてうまうしむりうまへどおうし
やうそへしをんよいさびんちろうんとて、
あれぶちよひめぶしてのれをろれとあしひ

ちど笑みて、さごろもまくりあげてもさ
昔のおもひでさへ心ちどいはぬばかりうちけうをと
りちらくそのへんいつくちげくくおざりなめへ
まさればよもけぢうさはとうけおびさうう
さうおぼろけもあれこそろさもされば表も
すくうさず、ひとつ二本のえうな對へ脇のかた西之
るのひさしすへなりて、さささごのさうも
るめされば、いよつやるろさちもさうれ、
年月のつもりをもまぶれちくうそへさう心
ちひようくおぼめさいうごうくそと恨
まてなお、おいくえ文切、まもあをぶなさしの
うえいぐちなど表まつまて、ちめくと人はんすくちろさ
家のうちの有様よさもうつりも世れとおぼー
でろさよ。屋いぢうがまれちれど、まとろ洞
もろこちん。昔ようりて、おとおくしくいつめし
始もれうこれをうてやとひさうごうおよ
年月を中よ備て屋波のさもさぞくく
おつろちぐうな
脇
洞のさささめぐろさ水そりおよ
ろくく絶さおどうけもちれつまくのへどうへ
をおばーいづるもこれよようおほういろいぐ
さささもおりーせのさそぐそと、そ出給よばぜ

今一さびの對面しおもすべうそうくおぼし
ましもとも（比）まとくうぶ（ぶ）やもろ一ついおつをざうし
人のさしでいさゆくく世中をさひそうとそ
うさをろやしくおけやけつくうのとまれ
て（敷）もちくおぼしあうて（ぶ）いくうさて（給）まふ
されど（ど）昔おぼしろは對面うそ世のこともをを
うめ心ちもて（て）え心づくくもてもる給つぶる程
らうくしくくつくうちうちうて（て）一うさもる（め）世
のつまうさをも（も）衣（衣）をもさひうぶれて（て）鉄（鉄）さがら
うそ地（地）給うそうそうそ（ぶ）（ほん）とうぶめうくんうりも
給えづうくく（く）衣（衣）まて（て）おけゆくもいそ（そ）ろはりうて（て）出
給うん（ん）ぬもう（う）おさぶ（ぶ）けのうぶ（ぶ）るめうそうそ（そ）ふ（ふ）も
ちどうのうさもいくうくうそうそ（そ）ふ（ふ）うれちる
まて（て）名おうすあう（う）楫（楫）のおさ緑（緑）もる（る）ま立（立）音（音）あちの高（高）
もる給（給）しばしのうくうちうんうとうそ（そ）出（出）うよ（よ）さう
月（月）の接（接）まけう（う）給（給）もそ（そ）のおりのうくうさでけ
おうれう（う）切（切）まう（う）中納（中納）言（言）の（の）名（名）のうさりをろうて（て）
業（業）でう（う）あけうう（う）よ（よ）立（立）うりおて（て）（門）（脇とおぼして）この名（名）よ（よ）いうる
深（深）けん（ん）多（多）うう（う）祝（祝）えうろうおうひまうそ（そ）いう
でうこのの（の）げ（げ）いうちうもうべうさく（く）まりおうくいぞ
ぞてまうそ（そ）やすひう（う）山（山）（中納言）ざ（ざ）いうりうそ（そ）出（出）う
月（月）のうりやうまう（う）さ（さ）あひ（ひ）うもうくやくいうち

すれさ夜のふくわびうたをきくれけふ
ちどをめづらしく行くてきさすがいまして
るおもしろおぼゆれいさうさまてもすぐうこと
なりるこねつざんやびくるも恨みて
さささこころもちれおこともるりしを、おくれの
うろびよ心をつうまひまるめせのうはざう
うろぐしされえへひごうてやこうるうと
ちひせう、そおおはくありぬんの物ぜのとぢぜ
まげるのうめしをまはしさつざちあうを
れ月を心よえまうをさせ給まづくこうしの人
うもつそうくてまうれいやうくなり
おぐりゆくまこうわはこうしうそ、らうのとるれ
車さうこうをうる人ぐも悲びてこけげうさも
人めて、れさ紀うりうる弟一枚おしをうまへう
もつげうこうもちめ物をこうずまる月をるげ
ざさやどれ夏浪いとくおぼーひづしひてうう
おのくるを心ぐうこうもう、女ぎも今更うりいと
てまうくさ夜ぐまちひこぐれのくるうり、弟乃
うげいうをるりうて
ぎ物をるげんうちまうとの別るぞけど
やこうりうずるのちこ



おぼさせめとけて雪こ給ふんの(歟)
ものすべきなれどいつしかへのとまりの(泊)
(添羽)まかまほしおぼしてもつかりける(泊)
ふん・おりあふこちすゐつゐでひとめとぶめあ
まびくもてくくて・うまいそびもぐくこひ
とこそ給ふ(給)うちつけにて今めいくもめう人ふ
おりふ給れ・昔を今もあいふあふ人のほど・中ぞ
ある男のふあふくとそ・さすふ泊ごさめ人ふ
まのこのいとらうふげふこもふる・かう心やすふ
はれふさこそふくされ・ごおのいふのきつこ
ふごてをふへふまん・隣(ごて)あふべくふあいし

さこそめざ・ふずふこそふりふけうれふろあれとそ
よろげふはふろとり給ひふ・おふごともえのうち
給ふずめめり・文(文三)の作方ふも・どこふる(添ノ)えつふり給い
ぶ・ふ(給)をふ・ふ(給)らへさこそつおりまず・娘(文三)文いあるふとも
ぬぶいふめを・ふういふろそぶも・やも(芸)いうずぶ
さこそけふ・つぶいつうあぶこそ給ふいふるぶ・
(文三しの五枚をこべ)そおふるもまて心ぶるいふうべき紙・おひらふる
うけふこさあてあそびぶこふひこそそあへり・
ふりつぶの(吟雅)作方いうちふへえまでぶ給ずれいと
まれ有がふれが心やすくふるひうまへふつ(吟雅ム)ふれ
ふろふ・ふとふるいふくのこおぶいふ・え(え)ごろあや

なんなど 男も 女三句 もつ うつ そ いあ ふ あ 何ぞ も
さ こ そんと おの ふ ふ のの ふ 人 添句 のの ふ へ い こ と こ
もるごのてこそいそ ふ 出め へ ぶて も さ て おもて
ふ ふ のそと こまるも ふ へ 男 ふ 活 ん 中 うう ふ
ふそふ ふ へとおばもおまりる 何心あるされ 女三ノ 有物を
活ノ あ ふ いされんもも ぶ ふ ふ くあぶさるけれど 活ノ さ
の活うんを心へぶそんもあのあ ふ と そぶおりり
墓 ふ ふ ふ くいぶ さちぶ ふ ふ ふ ま ふ れ ふ ん ふれ
よりうこの人やいあるべき 男の 活ノ のあもそうあ ふ さ
海をこてもさきりうるぶりこそあ ふ あ ふ ぶひ
ぶけ ふ れてうちちぶめ活ノ ふ ふ ひぶ す ふ ふ も

とのぶ ふ ふ ふ ふ る 地 おもそ ふ ふ こ ふ ふ ちのこと く
あ ふ をさ ふ ふ ぶ こ ふ 月 おまそ ふ と
こぶ ふ ぶ そ ふ ふ 院 添ノ 活ノ ふ ふ ふ ふ 文 女 地 乃
元ぶどの ふ あ ふ さ海どもを 添ん ふ ふ ふ ふ ふ ふ ふ
ふれと さ海ぐ こ ふ ふ ふ ふ ふ ふ 先 ふ 川 ふ ふ ふ も
年ごろのあれのふへる人のおぼろけ ふ ふ ふ ん が ふ と
ふ く おどろ ふ べ さ ふ も あ ふ あを 活ノ ふ ぶひ ふ く
そそふこのあ ふ 地 ふ ふ ぐ さ こ と ふ ふ ふ ふ 活ノ
けふ ふ ふ ぶ ふ と く の ふ ふ そ の て ふ か
やうこいまめ ふ ふ く ふ ひ ふ 海 め さ ふ ふ ふ 活ノ さ 海 ぐ の
ふ ふ り も ふ ふ あ ふ あ ふ め 活ノ で こ さ ふ ふ こ て 活ノ ぶ そ

よりこそ　いまさらに　ぬれまさりけれ
つれなめる　れぬさ夜の　まくらをいつでく
たもあり名んと　おぼえ（ず）　うちとけうつろれる　翌（あ）
祝（ず）のまくら　いれ（添）　つけて　ひさ人
しみの　ふるまいと　いつまでも　よそ
らくくうけてばかりさめへり
男　ちく　我やこゑんこうまくら　翌（あ）の
山もうけるより　とあう一ツ　埋（添）　とぐめて
水鳥（添）の　青柴い　文もちそくめど　嵯（こざ）のまくらこそ
乱色こそ　あれ　おぼえさそへつすさび　添（そ）
あだて　心ぐるしさ　これ乱色のまくら

ありつゝゆるせ　こゝろもくけちまへるも　有ぐるく
義よ　おぼ（添）さう　今　地　女三ノ巻ともいへど
べくれい　慢（添）　月（別）へ　いつまでもありぬ
いつ（添）あるまじきこと　いくらぐくおぼしうへすまも
うちぐうち　男（添）　女の　方（添）　こちのくぞ
けれ（添）　をいむつまこうまよこそこゝろてのへり
いつうけうけばおくおびまさりのへうを　心（添）　隔（へだて）ぞ
うるとこゝまり　給れ　物（添）　なすいくなつくく
実こそまて　味よくありて　実（女三）　よも　対面し
のへり　いくおさうげこのこみえのへ　心やすそ
おとれくちくありやめさうさ　後（女三ノ巻毋ハ柴ノをだに）　昔のれもぐ

なども男(これ)も物(女三の巻)など語(女三の巻)中納言のみよくさうつゝみ石(女三の巻)出(女三の巻)おな
じくうへを物(女三の巻)のゝしりあつかひけれど(女三の巻)見(女三の巻)ゝ
とがめ(女三の巻)ものおと(女三の巻)
き聞(女三の巻)ゝてさすれどけぢめ(女三の巻)ゝてなりつゝを今
ゝりいうとくす(柏木の巻)おもる(柏木の巻)ものから(柏木の巻)ものゝてをこ
さんことをびおごろうしもごとも物(柏木の巻)しうあり
ぬ(柏木の巻)うれ(柏木の巻)しくさもなどの給(柏木の巻)へで(柏木の巻)さまも(柏木の巻)しきされ
うげどもさ(柏木の巻)ぬぐ(柏木の巻)しをられ男(柏木の巻)のゝて心ばそげ
なりまさめうを(柏木の巻)ゝられゆる(柏木の巻)しなる(柏木の巻)物(柏木の巻)めれだ(柏木の巻)ます
こと(柏木の巻)もなく(柏木の巻)ふ(柏木の巻)のへ(柏木の巻)ゝれけ(柏木の巻)ゝそひ(柏木の巻)さ(柏木の巻)ゝひ(柏木の巻)ま(柏木の巻)しきされ
う人(柏木の巻)のいろひけ(柏木の巻)もうぐ(柏木の巻)く(柏木の巻)ちんれ心(柏木の巻)へぐて(柏木の巻)男(柏木の巻)し
給(柏木の巻)おぐ(柏木の巻)つもけ(柏木の巻)ちされ(柏木の巻)宿(柏木の巻)侍(柏木の巻)をもむぐ(柏木の巻)てなく(柏木の巻)物(柏木の巻)
ゆべくぞ給(柏木の巻)りし(柏木の巻)うりく(柏木の巻)まもさ(柏木の巻)ちん(柏木の巻)れ(柏木の巻)ゝさを男(柏木の巻)
給(柏木の巻)しまぐ(柏木の巻)ゝさ(柏木の巻)ゝ(柏木の巻)ゝいぐ(柏木の巻)ゝさ(柏木の巻)ゝぐけ(柏木の巻)ちり(柏木の巻)しれ(柏木の巻)ちう(柏木の巻)
そこのゝちいうぐてとのゝさひ給(柏木の巻)れど(柏木の巻)ゝなぐ(柏木の巻)よつけ
てもぐ(柏木の巻)ちぬ(柏木の巻)ゝ給(柏木の巻)ちんちり(柏木の巻)ゝりゝと(柏木の巻)やを
ら(柏木の巻)ゝをとゝ(柏木の巻)ものゝろけをひ(柏木の巻)ゝて(柏木の巻)実(女三の巻)もれ心(女三の巻)よつさ
ゆべく(女三の巻)ぞ(女三の巻)ものこと(女三の巻)ひ(女三の巻)おなのすて(女三の巻)ぐ(女三の巻)ゝさ(女三の巻)ゝ聞(女三の巻)ゝの
やうさ(女三の巻)ゝてゝのへ(女三の巻)ばけ(女三の巻)よ(女三の巻)いとゞ(女三の巻)もく心(女三の巻)ちげ(女三の巻)ちる人
ゝれと(女三の巻)おさ(女三の巻)ちさ(女三の巻)れ(女三の巻)ゝ(女三の巻)ちよ(女三の巻)いう(女三の巻)ちゝと(女三の巻)けタ(女三の巻)へり(女三の巻)ゝさ(女三の巻)ゝて
のちいつれ(女三の巻)ゝれ(女三の巻)おこ(女三の巻)ゝり(女三の巻)ゝひ(女三の巻)ちぐ(女三の巻)ゝて(女三の巻)おゝ(女三の巻)ゝさ
あゝそび(女三の巻)ゝちぐ(女三の巻)ゝつけ(女三の巻)ゝて(女三の巻)もう(女三の巻)ゝとく(女三の巻)ゝ(女三の巻)ゝ男(女三の巻)ゝしく(女三の巻)ゝ
給(女三の巻)世中の人(女三の巻)も(女三の巻)おの(女三の巻)ゝり(女三の巻)ぐ(女三の巻)ぐ(女三の巻)ゝり(女三の巻)よ(女三の巻)ぬ(女三の巻)ゝり(女三の巻)ゝあ(女三の巻)ゝり(女三の巻)ゝの

ことにいひあつまれるに、（法）
のうへにてとなへおはすれば、いとこのうへ
びのやうにはおもひおはすらいをとりあへず
ひけうを、今すこしふるさば（原）心ざしくてもま
ゐるさ間おもひをかけてもまゐやをうず
つふへにあるよう（法ノ）くびをくさへさしうそ
ゐへにいとをとりてやすくゐけり。神ぢば（原）
基のうへ（原）院のれ（原）堂（ぢう）にて、薬師（くやし）
佛（ほとけ）供養（くやう）なり給ふ。あるときとはもち（原）ゐ
ゐのへにいとのびやうぶをひきまはし（ひきまはし）
ばかりにてのうへ（ごくらく）極樂（さいかう）寂勝

王經、金剛般若、勝（ゐ）鬘（まん）などいとゆゑ（ゆゑ）ありてよ
む。遍昭（へんせう）つねにまゐりあひ（あひ）たり。ぞうの（ぞう）法師（ほうし）
いとたうとくおはするに、御簾（みす）のもとよ
りてをさへ（さへ）ぐりのべの行（ぎやう）ふをもとめて、
ゐもとにまゐりあつまりてよむ。ふしの
ほどまでよむべし。書（かき）おはりてとりあげ
車（くるま）のしりにをしやりてくのびてうち（うち）ずきやう
我（われ）もくとて（それがしなどの）ぐりのべをもとせのふ。廿三日
をはり（はて）年（とし）ごとの日（ひ）よりて、この院（ゐんの）いとすさま
じくつどひ（つどひ）まうでくるに、我（われ）もまうでくるに、
二条院（にでうゐん）までそのれ（それ）まうけいをとき（とき）をとどめ（とどめ）おくる
ものどもいとおほかり。これ（これ）

ふのみをいれ方ぐもろべらこよむ日けて。のぞ見
つうまつり給。毎いどもいへの爲こゝろをも
らひて。爰ぐべ話大夫院目ともべまでのまうけ。
いろ〳〵もてなせのへり。もん爰のもちいでを。
例のもう〳〵ひてらてんの倚まうてくらり。おとぐの
雨のまよれぞのつくゑ十二ゝうて〳〵。玄冬のれよそへ。
れみす風ちぐ例のぐく。ぶのおやのおはひども。
うう〳〵くこゝにつくうて。うちの心いおく〳〵ちぐず。
おまへまをゝ私のつくゑみうう。ぐ〳〵のらをすそ
ごのおひ〳〵うう。ぐ〳〵の基もぢんのけそく。
ごとの爲。銀の杖よみる心ぢへちぐ。淵景舎の
かおへうまて。おう〳〵のゆ方のをゝせゝまへる。ゆへ
みく心ことちり。うまろのれ爰風空招も。或つ〳〵家
ちんをさせ治けう。いうらぐく〳〵うて。例の空季の絵
ちれいぐめぐ〳〵をゝんすい。淵ちぐめちれぞ雪白
一。ホのくべまへて。をゝ私のぐづ〳〵みるようひ
ゝそ〳〵れでうぐぐもれいのくちり。ゝちまの日さ
一よ。ゝ迷つ。たゐのだ尼。或つ文をつぐめ申りて
つぐ〳〵いまして第ちめひちち一。舞甚老ん
さうま。ホへのひ〳〵ぢうちて。まひんぐ一よ。ぐん
ぢさハ十ぐ。う〳〵のつひつ空十つぐてゝそうう。
ひけ一ごのゆぢちり。ホへまいろまんざいらく



つうぞやうもの等て、日ごろ程よう雨のらん
きやうしてらくそんのまひもうほどれて
めもれめまひのう雨もればまひもうほどよ。拍
中納言清つ等ありてびりのやをはのうまりて、
紅葉のうげよ入めうみおおうずりうありと人ぐ
ぞ一うう

いろ〳〵への事程院のの（お茶の間くさ）
うし〳〵夕（ゆふべ）敷心（しきこころ）ひおおくへぐさ（多）指中（ゆび）納言（なごん）清つ（柏）
のまさをさしず立つぐさ治うけ。世くのおぼし
有程（ありほど）ろうういちぐさ。おさくをさしず。けう
くるねやくすくさて。さへくそてぐさくひの程（ほど）も
ぞくへてをさくべくさて。昔（むかし）うくくちつぐさ
くろれちうくひるうちとめでくさくちふ。おうぐの
院（ゐん）も。衣（ころも）を湯（ゆ）ぐまうくく。そくく生（いき）くくとぐおは
うう。我（われ）よりて。ふくぐもまうひつぐ。小（こ）の政（まつりごと）百乃
別当（べつとう）ぐと。へぐひさみて。うくのくひつようて。
ひぐりでとうてつぐくくまふ。ろうさ池（いけ）ぐも銭

ろれぐうぐくそ。山ぐ（やま）ぢうう池のつくろうう程の
くそめか子（こ）寺をうれてあそぶ。露（つゆ）のも（け）ぐを衣（ころも）まひ
もうぐくろ。れおそびもぐまうて。ふいとおまーろ
しれくろぐも。共（とも）家（いえ）ううぐさくのへくを治（おさ）けう。
集（しゅう）覚院（かくゐん）ううつまいれうびく。さん（琴）治（ぢ）（冷）ううう
多へるさうのくろぐ。れ普（ふ）ぼしろものくれ
ぐもうそめぐーくうさおそをのへるう。治（ぢ）（ほん）のの
おりまもまーまのれおりさ風。ちつうちぐ
ぼーいぐくろ。おのをの（かつぐ）をおうをまーうぼ。うろ
れ変ちぐ。我くすくくつうまうまーぐろまぐ
まつけてういろざーをまくをりけんと。おぐ

くちなしくのこそひ出(源)つゝ給(冷泉)うちよゝもおとゝ(為尹)のおりしもさめこゝろをおもよごとゝもをもへおくさうざうしくおぼさるゝよ(源)ひ院のゆくへ(行方)ぞよ例の絵をさる所のうへこゝろをつくしてもそこをも(源)ゆかしうおぼしめさるゝよしうけ給(冷泉)おもひつゝけて(源)こゝろさうどもおほくおぼしめしてそれど世中のさわがしくひとんことゝさゝせ給(冷泉)ふじ(源)ちんとゝいふびと(源)給ふことゝうびくこゝろ地(冷泉)なれば口ずさみ(源)給ふもさる事のおほかりし(冷泉)中(冷泉)なかぞらの(源)てことゝ(源)の御ありさまのいにしへのふみ(源)の系(源)の七だん(源)ぞうし(冷泉)給ふよし(源)ぞんじ(源)られさぶらひ(源)の四十寺よりさる所(冷泉)の四百よ(源)をけうじてさゝせ給ふをうけたまはりてぞんじ(源)られそうらひ(源)ぬるよしもうしあげ(源)さぶらひ(源)ぬ

ぜんぜ(源)ら(源)ぬ(源)ぞんじ(源)られさぶらひ(源)ぬ(源)ぞんじ(源)られさぶらひ(源)ぬ(源)ぞんじ(源)られさぶらひ

ちゃくいつめいくちゃんありけり。秋の比
ものもうでまいれもうでひまごてさえだ
ごとうちうず。よ廻りの猿おどやうやう
らんで。ここちもけしくよのさうぞく。潮ひさんざん
の体。もうちゃんぶちちゃく。くの奥ごんよいところさ
ばそちゃが一ここと。うごごちゃごで。呼ぐようものよ
さうぞく。狼ろうちゃくふこうとつこて。えこうさおびれ
もうちゃく。放高慢のひ方ご抱えて。つるりうまり
こうも。まる表よちゃんふこうと世の一ひの地とみあり
狼いこれひごひまいうひ変うりちゃんありう心う
抱えこと抱えこうをうこうこうこうこうこうこうこう
つぶけこめれごいこうこうこうこうこうこうこうこう
ひのこごもけ。えそこうそへあへ体へめや。冷ん
抱ばこへこめてこへこそそ。せひげまいこて。中納言
まそつけこせものてけう。それの女大将やまひこて。
ぎく結けうをこの中納言ま。れ変うりの行こうこびくそ
へんやこへめて。俄ようこをのひ。院ゆもようこびくそ
笑こそ結抱うこのこうく俄りありまう悦をちん。
いちこやさ心ちこ体うとひごこよ結。こうこうこうこうこう
まちょ。ひまちこひまうけめて。くこうへこうやうよ
ちちこのへれごそ。ふいちをこうこうよこうこうこう
まきて。ぎくの碧ちごも。毫づさ敷禽院うう。

つつまつりをものへり。さんざさわぎ。おほやけざ
まで。ちゅうおう。宣旨下りて。こころもとなく
大納言さうり。中納言三人。宰相人。参ざくべし。例の
地下家。院のこうすくおもしれでこどぜざるい。
物見おほく。さくさく下りて。つまつりをものへり。
ふい作ずおりて。ひろまいりものへり。院をい
うくおごろきよりて。ほんざうつきものあやしや乃
おまつり。むくて。おとごの出産ありいとさうもの
まれくもくおもりて。これおとごぞ。今さうりの
もうさくとはこしものへる。おとごの院いれいと
けうさ陰氏のもよう路。れ無尾。ほうこ拾うり。冷ちの
れをうちものへる。うこのあやのうすんうり。おる
志のう陰ちど。ゆろうもんやいおそうさ去秋の
ひうり志ちど。ゆろうも。このれ屋風のすこつうれうや
くさまは。めもそよず。そひおうさへめでくく
ちんありけう。玉祖のうづひさまれ山も祖ちど。
義人ぞうり治うりのへり。ちれのれいうさほひも。いと
つあくく吸治ようれいうちうへて。うよ去作法
いとくちりれ馬空十廷。たたのうづさ。六陰府の
官人へ。ううつぶくよひさくのうち狩。日うれ
さそれれいの万歳永宝室亜ちど。いよ薬。玄色斗
まりて。おとごのつうりのへうよめづくくまて

くやしくもくるれおそびよ。それ人心をいれかへて。
ひくく。例の笹(笹)で文。なげすてもせよとさゝぬ乃
よ(夜)をおかして。つとまよ(夜)おまへさんのいと。
おもく(思)和琴ひきなら(習)し。こゝろそひのひよけみ
くのさゝやきやいとゆる表よおぼさるゝ。
れいさんもれもおもくくしなら(習)ず。いさぎよ
れどもいづ。音のれ物絃どもなどいでさて。つまとる
くられまくひよ。いづくうつりてを。さゝて
くひかべきれひびおど。ゆくくしなて。はらら
おまさたびまりて。地の雨白さとさでこゆりおくれ
ゑひおさどもえとくめ給(給)ず。れ(れ)をくりおれよ。

すぐれよう和琴一。このさ給(給)こ笛笙をへて。おとうさん
のさこひとろひよ。うこのほんだ。こ(こ)のさうの乃(の)
なぐいれて。れ車ををのてなれさよ。れ(れ)もまどを
むりへさうて。右のつさどもこ笛のさくしてのく
さろ。六ろふの官人(官人)のうくだ。大(大)ねさよ。れ(れ)心とそさ
かてくいめこさくまは。ひさびとさめめへれど。
関。芸(芸)家。一院(院)。新好。名(名)をつさくのれゆりつくしき
行。ついさうずこしてろくもれがれうふありり
まはめでくもんおぼしけ。大(大)ねのさ(給)ず一さくろ
おさすうを。さうさくしくもへうさいちをしど。
おまさの人(人)なすだれ。さくさよ。人(人)さもうさそ

ちゝやうと相しり給ふも、それも〻（母）方の、伊勢の
家ゝ（にて）ぞとの、恨（うら）みつゞけこゝろ〻し給ふん、程のほど
もくせどものめをもとしうちふん、さ（ぬ）ぐありけ
るその日のれきうぞくどもおほいこゝろ〻のうへ（に）
ありしのひけ、袴（はかま）どもたるのことさぞ、三条の
宮方（みやがた）もいそぎ給めりし、おみ〻よりはじめうれ
いとうとう、うちくの物のさうぞくをも、こゝろ〻
うぞうそのことの字つゝり給をおほごと
つけてなげくあまくしきぞともおぼ
給いまゝとおぼしうをたれの名のれゆうよ、
いとうとうぞまへられのへうし（源平一ぎ）ふうをぬ
つぎのれきうさちうづき給めうこゝろ、正月朔日うり
うぞうぞんうりきせのみ、ちく社（やしろ）くのれいのう
も（物）も〻ぞ、おいこ（源ん）の名ゆ（ゑ）ふ〻（ん）ことゞもこゝろへ
てうぶうなれどもくし、いとおそうしうを物
おぼしこゝろうをこゝいのうへ（に）ちごのさうこゝろ
まもぬいくちおしくさうぐちう物こゝ、うれく
おぼさうこゝ、まこゝいとおえうちうれぼごこゝいうこ
おそうんとうてぼしうけぐこゝ、三月（せ）ちうを
うり、あやまちく物（名ゆ）ゝれ色こゝうてうち物こゝろ
ぞもさうぐべし、陰陽師（そんやうじ）どもく、家をうへて、いく
しもべくやうれいかのこゝうこゝうれこゝうんと、

なばつるてとて、みおやのれまちの中ゑ
基よつてまり給ふこゝろさいとおほさるゝこと
あさからぬをもちんめぐりてありけるよ。俊法のぶんのまもりてゐるこゝろさなんさまけるにて
のてまろむ(名)ゑこの時うつすくをもこゝあべき
ワざもあれいとくき心をつくり給はぬ(兄)ゑも。
今いとよるさかげんよそでありけるてばれ(名)
さ商をこまうい音の心ちきて、つてうとまりちづきもれなるとこゝろむ(名)まくゑいうそのさふ
らひをへい音のとくおぐまはうもさてもてを
給はざりけるばれ(名)おまゑろこびまえうへぐとうり
てはいとく酒ぐちよりめてそくまをまるくさ
出つてうさもおやつるもおもつる(名)ばふ
さ人れとうちまもり給てとうふ人(尼そも)おりと
ぐろいはのさくをさみへれいおつてくまてる
夕くむ(名)ばふ尼ゑ)まれをのしはどおのとおく(源)おくの衣のみ
浦まおりてまうりさ商今いとて京へ
のぼり給てまれもくむ心をまどりて今い恨
ぐろりのおりまこそいおりくれと歌(てゞ)うさを(名)ばふ
ゑのくひさくみへるれすくさまいくく
うてさくとほろくとちけ(名)ばふまゑおりけう
音のまくをくさをぐまてうべおばけうまく

てもをめべくりくりとそうして、おもき給心のうち
うはづごこへげうけごうて、いくごとうべさくこと
うはおくざりけうを、盆のうへのれもてうこと
がれて、人のさうさ風ちでも、こうかうはおしあ
ちうくり、男をば文うる物ようにてそ、文げう人の
ほいうをもこうへのへにをがうひけちこうなさうろ
をごうをがちうれ世人いもくようひ出うやうようも
きうこんうちご、そうえもうそめもうごおをいもと
うりくすうしうくれうようごとちりちご、
ひまれ給うん程ちごをいさうせごちれうさうひ
まてちじもちう給へざりくうりいとおもうりのほうき

へるけよくていおやもくおばくちうりけうこと
きうや、はへうの今の仏人のせうもをめやううて
おうちうをそうう給も心ごうくうちごうごうこ
ちひうごれもひめいと物表よおごめておりすうれ
うへ家のうひて、日中のれうごようちうさうり
系つごひおさはごくのもうよおまへうくへも
ふうう寸、尼ごあうそ、いとうくさうひ給おあ
ごごうやうごされ事のさうをてうさふ
らひ給も、風おごさはごうて、をけごうう給さ
ろびのひまもおんまうすうちごやうのう夜して、
うとさうすぎのうちやうごちうさうう

そひのへりとりてめでさぶ（尾ニ本ム）（遊ビ）てをるまふとてはゐばゆ
めれども（先もうへ）まうくるよくもおぼくくりくれむ
おくとるさぶそておもりさは（比）いとさつみだりに
まもあくぐ（尾ニ本ナシ）云千めこのほいとりおまみだく
いとぐうよおてあるさ風くてめやくうよ
るさきれくりそくれおやまく音ふいさうさ風
れがむ（ムナシ）のうちつづれてぐ（討）ぐいのひがくぐまや
伯つくんうくこのそれはのやうあるひがおぼし
どもよろうまぐつおやくさ音のそぐもぞ
まうでさつくんまや音の心ちそそ志伯れとうち
はゐるそてこをりのへばいとう（始ニ本ノ）風めくくれたちう

まそれいとうもいくくさづまり拍ばくくさ風
まくそ話（ワナシ）わみともはぼし伯うぼうくげるさよ
いくおりそくくぐ笑しのて拍ばくくさぐうる
まお今いくぐりとい（始ニ本ナシ）伯をそくるめ話もん世る
そくくまもくんとくこそ拍のへ人口拍ばくくおぼし
すのべるそ風あくのぐいとくおりくくうをさう
しおらんとおぼ（ナシ）面れうぐもてくまぐでめうこれ
ぐ拍おぐちくまうひおるこれ（討）ぐうりをぐくと
いと心ぐくげるそのてくる（始ニ本ナシ）へあまぐもいく
めぐさうまのちくくまもつまくも泪いえとぐ
めぐ。かいおくそ。ちうさちぐいさぐくしくるの

ぞうれぐ・まこのわうちうちさびれてひそこね
うう・あ(石河)るるるるいるとめぐりみれど・ま(尼ぎ)もいわず
光(名ノ尼)の治うひあう海よ立出てふねうるる紙
流(河)うさがめん・音のせまもうやうもうみうべえ・のく
ゆうされてあんねけうとうるもれ・すぐうあうううる
(名姫ふか)塩うるるあう紙ちるぐのもうべうてうぐのを
こぐやうう海の岩やを・(名)かうもえ並び治そぐ・打(名)浦ま
(名上)世を持(まち)てあうーの海よすむ人も心のやこいい
るうるうまうで・おぐ(比)るうるうしまぐるうり治・別(名)けん
(名)曙のるくも・義のうちうおばーれぬをうち
おりうもあり打うまくおばす・やひ(比)の十余日の

ばぐまうういうまむまれのめ・ものていかぐうくく
しくおばーうはぐうぐ・いうくうやうお治ことも
ちるて・おるこころ(ワま)こるる人おりすれば・限ちるくおばを
う海うて・おうぐ(深)るれ心おうおめ・ちるいうれ
のうるて・うぐけぐうき程ちるう・いうーうれう
やーちひおどのうちもうり・ひぐきうるる治ちる内程・
げるひおううるう・花ぎのうめいこうしうれど・
ぐうーうるうもやうれば・ワうり治(法のうえ)ちて・基の
法へもワうりめうり・もうちれうぐくもめて・人の
(名)親のうるて・ワうまとつくいぐうるてねまうる海・いと
おうー・(法ハまるそこ治あう)こぐうるうるもり治うぼ・人のうえう

てもろもろの仏ぼさつをめでうやまうのこと
その法のとうとむべきをおしえ給ふ程をうけ
いでうやまへばまことのぶつだうをなりて
仏ぜんのおつとひをけうまつる此
経ぜんの宣旨ある内侍のすけぞけうまつる此
むろ山よりおりうちもやうろくの
ことばのそうそうをおもてうけおはしまして
切うきもうをおきまくけるとくびやうの
契こそまれし給けひとうをこそ也。その
ほどのぎしきもまことにそんとうにいと
ありがたくおぼえけれいのおとこぐりつきぬ。

七日の夜。うちうちもれうがやしきのひのくれ
ぬ。
第二経院のくもをすそくおはしまされ
うやう。諸人ぶつ。仏弟子。宿。自然りて。ぶつだうの
まつりもうされり。禄のさうぞくなど。又中ごの
物ども。
物やけごとにいろいろもうしくさぐさ也。
つぎくのそこそこ。大だの部こ。その外のいとおも
しろくて。我もくとさうをつくしてつとりおこ
なひ。ぶつのみもとにこの程のことども。仏前のやうをみ
ことにそうをおもてせうくひびきこちこち程よ
く。
内くのお所ゝくの所うやまひまいりつどひ
つとめおこなひ。ゆふべにもなるまゝに。おとこぐの

ふたちどやうの物いふれそのものとまをして、この
国のおくの郡(こほり)より、人もまゐりひごろ、みちを山あるを
うごろまをさちごうごうこゝりちん
のち、まるひとゝきにしもとべきもあらず
ものてぐすぐつばつるまことありければ、いま
までおぐへるを、今はさりもとれ松をみれ
よてちんうのちのけこのちさうごろとり
てい来ることをまをてひともうつまら
ざりつこれうりぐ人ぐろうのけてちん、
一ぐろうまでも、おまえまをおうのごとく
うひけこゝろまをまのごちめまうまをて

ろまをれまへりこのうぐいおちぐ世中ま
うちまのぐひつれぐちまうゝくまぐ多を
人ゝろやうまものへまりけ、さちうまをる
限ゝろゝうけう後りぐ、れぐをまへるもめれ
いまりて、念仏もけぐいすやうまやくまうて
ちんれをうそこもまをつてまうけ給つれど、
若ぐい男ぐまう系のて、おろこ女(むま)れのへうまを
ちん、ふく仮(よろこび)て伯そゆへいうぐつくつるさる
山ぐ一の男まう今更まこれまのうえをうみまも
伯ぐぐまうまの年ぐ心ぐろちく六はの川とめ
まもうぐれいまをうろまうけて、蓮(はす)のうえのつもり

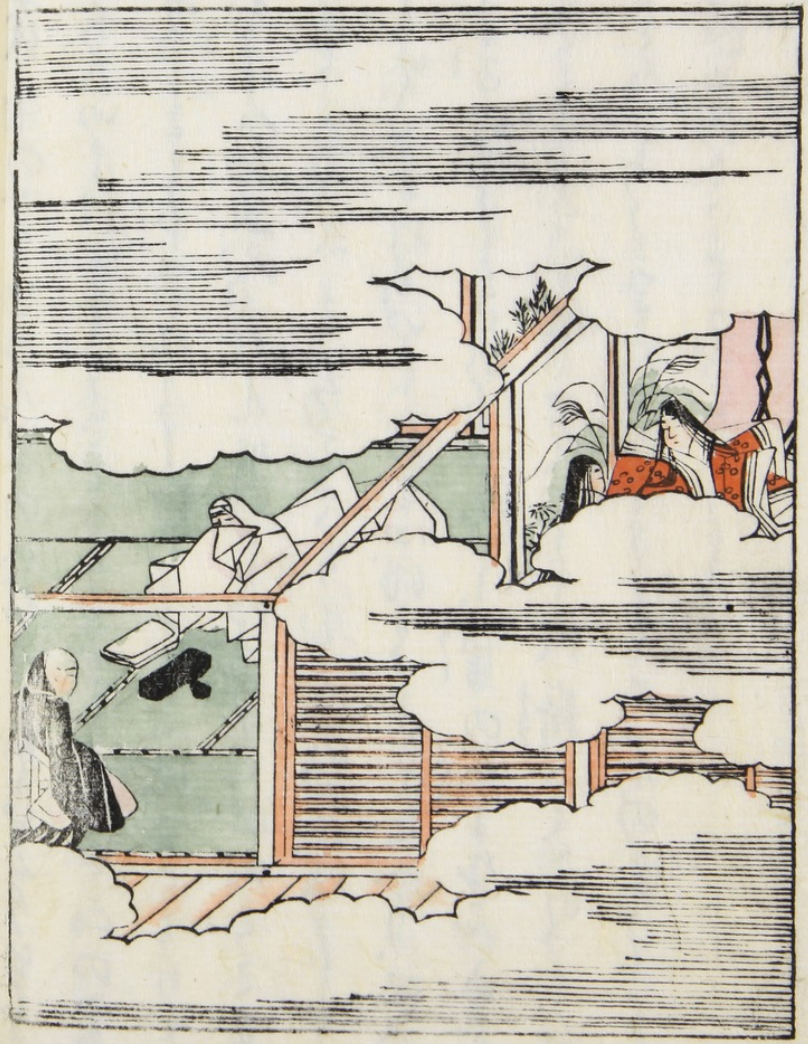
わづひをばさゝ一まてゐんれいんでなもう一我物をく
むまれはうんとゝそ一そのゝ一の二月のそ我のまる
ゝゝやうゝゝづゝゝすゝその山をはのまゝさゝげゝう。
山のたゝうう。月日のえゝやるゝさ一ゐて。せ一代
てゝすゝゝづゝゝゝ心のゝものげゝうゝれて。その
えゝおゝゝゝず。山をばひろゝ海ゝうゝべゝゝそゝそ。ちい
ゝゝゝまゝのりて。雨のまゝゝてゝゝざりゝともんゝ
ゐ一。まゝて。ゐゝうゝずるゝゝ月ゝゝのむ一ゐい
ゝでゝゝゝゝゝ。ゐゝゝゝゝけてゝゝゝうゝゝゝ一ゝ
ゝゝゝをゝゐゝゝでんと。心のゝゝゝゝひゐ一をゝその
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

んごこのひとつのこひちうさせるようひねめれいごろ
うまいりの方十万億のあへごそろれおのうへをも
のでこうごひちくぬねめれい今いくむうみう
連をねちう程そのかまでおまそよさやまの糸
そひとめねんとそちんちりりめう
ひろいでん曉ちくぬまう今でこうよの
ゆめごろうすとそ月日うそろう今夜らん月日も
さこよおもうこそいでうへろう人のそめ亜
けう衣ももおまようやつれのふご親方が変化乃
もれとそこおて光法しのうめまは功徳を
つちりまへびまれこうまへても後世をもれ
まふおれがひねう有うごういりねちばねう
對面いねりちん、さばのれのさこよいうてくく
あひえんとをおぼをさそそれ社そそねつめろろ
乳文でもをおほさちごちんのみごこよあむご
こうてなりまへり。おまごそこう片ことぐまうぞ
そごこの月の十四日ようん、まのいほをまうそ
そうれて。おうさ山まへねめうごひちう方をべ心両
おほそこまもしねりちん。そこう片れさひしねう
ちうれ世をまうち出まへおそうそうちうあうて。まう
對面いねりちんとものこまり。尼ぎひねうそそて。れ
つひの大徳ようへべびれ文をまて。ご日とうう

ちん。はこそろそろまいりひおう。おまごらもみれをもりこ。おまくまでいさまつひーうど。これへーまて。信一人まてこ二人ちん。此ほまつてろ。今つとうをそむをおーさそぢめとちよへーうど。のうおそう。さびをこちひのひまぐこうりまつさちんーおーこさんのれこびをうりまをまて。

ひとこべまて。仏よまうりこおまてちん。此堂まいちうこおーさこめもどまく。此方ちはまりまて。そおりをちん。此方まぜ六十余人ちんもうさ恨さまつひけ。行まつけて。これ有ちおまて。

ちん紙一のうをちん。余のれうとてをうまつ。いまけとてうさこまり。さうりけさ山の雲。すこまでつおこ。むちこされ仏よとまりて。ちこひちよへぐちん此方ちぐ。此方ちはくおうちぐ。此方ちこをつこいまて。余うぐうー人の。老法ーてちりてまれう。いと衣よ心此そーとこう。仏乃小指(こで)のさーさひつぐよ。鶯の拳(こぶし)をいうぐうぐーうこぜこれちぐ。れ靴(くつ)うさけうれまどのいおーつをけうを。まて尼老のうこととひへることうぐうち



ばれるといふをこのおりからおこすもたゞごとならねばうちおどろきてつらのかはりをもくちおほひをもてかばひてあるにやあらんとおもふにあらねどもかれがうちにあるこゝろもしらんとてかのつらをとりてみればうちまもりてゐるよりほかのことなしいとゞくちおしくてねのつらにかきつけてやりぬ文をみるにげにさることゝおもふ方ぞおほかりけるその人にあふまでもとぐしもたでさるべきことゝのみいひてとかくいひわたるほどにそのよもすがらあめのふりければ

我身をそこにもあるまでそこ後よあこころにのみと
中代そひこそこれにてこといふくそこそこさ
ふれこそひて心ざくねそこをとうけぐ
こひあそこをのふおまぎこひこくこのこて
志のれくまはられくおもぎこそこそとを
身よおまりてるこびるくこ後りおそれいぶもこ
そひもぎられてこそ後れ数をあまそてもぎ
へ一数をすてこうこそこびこみなぎる世
人こそびこうすくをこそおそれとそひ後し
うぶいけう世をりこれべぎこべき中の数り
といこうけぎおるぎ遠こすもべき後の世の数後

えひて年月をまこそて城こくこてあこと出
そて、そむこそこ世をまこうて後こひあれこと
こまり悦ぶまこうこまこよいおぎこるこる
ことのこちこそこてこあそづるようあひぎ備を
ちぎ世を割めるんにおくこそ後こ世へ一けぎ
人こあの心ぎ人こうに世をまてひぎもやうちこ紙
けるさどちれこちるこて、それくいまるく数こそて
それぎこるこいてみくこそれこ後ぎがいうればく
ここちこさ後ちぎこうて割めんとこひこぎて
ひき表こうちひそこ後ぎこもいうぎく返て、べこさ
ぎれてゆくこれのこともおぎず、数るあまよい後

なるべくやうにひかうべきものあれば、表ある
脩行よりはつてやうちんのごとくにかくれ
ひのごとくべき人（入通）のゆくあとにそそしたがひてこえ
こまりおもふ世中もさぶめるやうにてきしおもひ
ひろくちんとて、衆もすゞしく表あることどもおほいひあ
うおもひ日（ほ）もおもくの志のおもてさまのひと
てを供（ほ）ることひとれこんもうぐもちゐうべし。
ひとろいるごろうもひとぐうゆくぼうくそのよ
ひくあちどれいをおもくちゃん心よそて男せまして
あるようくべきとて、晩（暁）ようくりのあ（尾）ろべい
いうぐおもひまおひくべきとてもあるさ
め（ん）ぐ（ん）ぐりのそんおれ（ん）のおもひくあれなん
ぼーむひくまくも世おもうこれのいぐで。
も世中おもやうちぐ。院（ほ）もこれのいぐで。
なれぐおもぐこそ行もぐちぐ人おいちんとのおも
りさ。ひくおぼてこそまうおんとのくまへぐ。
又（ん）うちそそいぐでやされいぐこそ。そ夜ぐくあり
あるきすくこそおれこそろぐ（北）このおぐくい
ぼうきてまうのぼりのあ。変（裏）ろくまいりのべさ
うーのごおれがくく（実汚）おぼーあうくこそまちう
ぐーくこそ人そのそ。ひくい心まくちくおぼ
ろくんと志のようものそ。ひく変志のぐそ。も

なんのれうぢひしほ（名詞）ん（助動）ず（助動）と（接続）
のうちやそうめんうりて、うるのいそぢ
ごろ、わかまはさくばかりうばひとられ
うりそこなひそうめんをとられ
やをばそうて、ぢごくも（名詞）ものしさにいかく
なうりうく（名詞）まひごくなりすばかりの
なてこそいるが（名詞）ぶんなどいふ心ぐるしの紙
（接頭語）おくぶんやうのものをやきてこしなりけるも
中にあくれをうべきつぎなりなどのこまかいの
うへなどの、つくりなりなつてこまやかなりて、
（名詞）ぶんしやう（名詞）まへなりなて、これみぐるしきを

ぬぐうつる風なりひきてこをみなでいとうるく
もて歩てゆべきれど、世中ぶあぐるれぐうそろ
うるさまなん、ぶんをもれ心とおぼしうずまへ
ざんこうるく、ともくもくるく吹ぬるおぼしも
今このぐちのをやうんぢうべき男まゆれば
れうのしこうをずゆるせまなん、ころうるさくをも
ずまきをくべくはけうとこひゆて、むうくく
あやうき泣もれど、これもれうんぢ（名詞）よ、これ乳文（名詞）を
ちうさぐしうぢうるをもをみて、うそうみさうる
べうんなりうゆうんしてぶうちのうぐをも
ききせまへうとうさへいるをしさを泣そぐぐうち

（空行）あがうことやいつまであらしくありふくことを治められ
ぬ心ちするひよ空もくめやうもなれすることびとごとを
ことばづくでられとてほゝあまのへれど拙者ありも
けられることどもとるれば（添ふ）おやしうちうる
ふさのへうを面もれば（空ふ）ワうしうとてうれ（行）おくの
（いえや）名をうりまびてはれいのりの巻数（ふん）まぐまる
（ぶん）執もどの伯けうをれことろうもまこせまうべき
ありあくばれくうでをくべきやとて伯うを毎ぐ
今いつのでるて毎くいあけきを治いんと空え
治まばげる（添ふ）表あるべきありう面そうとはばしして
（行）いうまをるひまうて（添ふ）すことあひまうん今もづて
うくのうしばけとはつもそよあうんうし
世中こうしあうくうるぐの人とてくる
まもこの世まそくるはぐのまごるをみきうや
おくんうくうさくくそれいてくぐりありけ
せうばぐりりや（添ふ）さをいうりみくまずる気文
ありし人の有様れひぐりぐちは世をそれがか
まもあるれもれうしるさの心もこれあれ世うり
くひすこいうるとくそこしうがまして今は心
ぐうしこはぐしもるくまひもるれまうんをやう
やすさ労あるくばまびてはまはしくこそと
の給（空ふ）今いれ伯（添ノ）一事をもすてく旬のるをそしぬ

山ごとくちん字伏ろと字ゆれいさぎよくがそのゆいごん
なるとおさうそていくそうそう治や尼ぎいうそう心
伏ろんおやこの中うりもべうそ海の終ぐりそうそ
そ終ろうべそれとそ・うち明ぐそなへうぐそ・のの
そりよ世中のありそ海をとうくおまひとりゆく
まうそおやしくそうくそひ生うそ人志れありう
海なれいふそちぐりのおうそひとういうそ衣
そなんなどのうそふのいぞよび義ぐうりもおぼし
おりすうそもやとそのていおやそうさ・がんじ
とういうやうなるおとうそもべのれど・ゆうんじと
どひべそうそまやうぐそ伏ろとそてなん今かとそ
別うそうどれそてあそれいおりなまれちりれ
とそ・そ海ううそうちなうそ終ぎうりのそいとうそく
なをはれぐそうそなうそそあるべそれるちぐも
もべてなぐるもづぐそいうそくそまものべうそけう
人のうぐひせみうそうの心そそそすくなりり
それ・それ終ぞ終のおうぐいうそうそくありぐく記
そろざそつくそそ・おやけよりうまものう海
けう終よ・まれそぐひのありて・それむそのようく
すぶいうそうちりちぐ・ひとういみりしを・女よの
うそこつのれど・ぐそそとつぐなそうとうみ
べそうはあるめそそうのをそうひのそうそうこ

こそいわしあるべし。消をしのびの給ひて。その夜の
つとめとくびの給おやうやうひがくしくすごろ
こそこそ心ざしありとく人もよろこばまるこそれるべし
そうまひをうちてもすうれとそひ
しくこの夜の給しはよちぐりみつく
そひそうしうびかれまへこそあるべとと
ばつるくそひつれさらばうみ
のこそおるぢそひのでこしりそうこと
そ夜まつうしまめをこそうひもび人ひとりの
みこそそるれづそるれをそうまをそて
けんとゆしくれば心のうりのこそくうり

給つこれはまるべくてなるべき夜給り今まる
そこそしそこを給んと女所こは男給そつついでよ
いまはくうしへのこをもみぬりまりみひぬ
ればおるこの心そ人ををうよばしうみ家
もくうそこべき中そこめむつびよりもよこ
そ夜の人のうびの表をもひとことのこうを
あうはおぼうのこるもあしぞまてそこ
るべきひれ給をいうくもそうろ
さしそぞおくわんびよりそそしうを
いうへの世のこへもそそそうべりは
そべこびれどうりしこうめんも

くこころやうられどうはおやまりても、ワがこゝろ
(継母ガ)
こうさのこゝろゆゞこゝろん人をさゝひようぶう
ちうこんこゝろのこゝろへーおそれよいうぞうろ
まはとつこゝろぶりーこゝろもやひちをちうこともおろ
べーなばろけの音のせのあぶもちもの人へいうぶ
(人ノひろめ)
みぐぐもおれどひりくーつこゝろ時まはなの
づーこてもをまうこゝろあーどをあうべんめりさー
もおうまづさうこゝろよいうどくーくーくををつけおい
ぶやうちく人をまてもろもつゆおふもいうどうち
とけがくさひぶおうきワづこちんあうべき
ゆはうはおれど人の心のこゝろほうふおを
むこをこゝろよゆへうーとひさほくーこうちゆ
うーめこゝしのこゝろぶせあうべありこれをのく
えゝろゝうこありて、とう有ちくもおくもどもこゝろ
こて、ワづうちろこゝろひまめくーくーくえーひ
ゆもちんこいおりづこきワづこちんこぶまこと
こゝろのんをちくこゝこゝこといこの墓(生)をのこちん、これ
をぞおひーくちるん人というべうけるとちん
ちひゆう、ふーこてみおまりひくくそそこれもしげ
ちさもいくちちゆーやうづりの治う、治(治ノ)をの
人ぐいちひやこれめーこゝこゝこてすこーもの
ゆこてゆーはめうをいとうくむつべうこて、

このれうちうこをもおもちでしんこてねーしのへおど
ふのびやうのかふ(ママ)のおもをれどいつしおりござ
ゆそーこをこそてまうつまる。羽音のこしうこ
をこしゆうぐ(ママ)ぬーこさおもしまちじおばーしゆう
さじらんこうまでゆんーじさうべこそうを
あーおをうこそーいうこさまでぐずまへのこぬこそ
れがくりていまだゆくさへちん。ぐずをーおの。
さすごをこおもれこそこうもうとうこくー
つまーくおもふのへくうーをいこちうさぬこり
をてくされなうてのこそこをまへで。そ(ママ)の
れーうくいが(ママ)の心ざーこいあーんこ(ママ)このれあり

さ(ママ)ぬをうち(ママ)うこひてま。えこをおおばりうさま。
ゆ(ママ)づりこそこそこうありこれまさうまちて。
けちえんこちぐおーこれをてちーぐこと。ろりのの
こちれのまやすくちれでいこちんおひうく
うをこーこさこちうこそこそもれ心そて。ひがく
ーこさひとはぐらまぐらおこつけて。人のこあえ
くこさこおりうーこそてうを(ママ)ーぐうく滝も地ー結
れが心やすくちんとの結こつけてまこうりやこう
こそひぐーこれちぐおのひりぐけこまふ。蓑へ(ママ)
つちり結ぬこさこ(ママ)いこやんぐこちこれ心ざーのこ
こちうぬこれぐこと人へうこよーうくーしこも

ぐしやうあり。さ雨のふるときこそしづかへるこそぞでこそれ。（さ三）気のれうべのれまうづさのこゝちでこそ。つくりぬまゝもえもいはぬめでたうざうのいふこゝちぞするさうざうあるうへ。（さ三とばノ）おもひすぢまたおこすれど。つゐ一ところにゐてくとゝもりうづら。字治につけても。ワづすくをはいとうけふぞそしおけうやんごとなきさまなれば。さ雨こもあるべきあめ也。まうてゝちまでこべきおぼしまうあるにいづべて今いうこゝちもみちぬふべきおぼしこゝちもするやまず（入道ノ）こゝろをやひやうのこゝろをおこなひつゝもたゞ尼ぶもうべきちれそのまゝこれをゝゝてとやうちうちひとことをおこそ波のあをやひやりつゝもたゞめおもり。（さ三）おのれも。式姫のあのれことをやひをそゞめうもあべきうしたゞめうちくおりまゐをいとこゝろもあべきえぼ。大ろのれうづさこゝりけて。（さ三）さまたうりめべきおりくるまうちれをよべづこゝけるひ有様もこ字治にいとつくおほとをめ今一をちそうへのぎこさいうめしくせのまゝこゝりぢうもてうづさなりめへれど。おうさくけべやうもれめくいこゝぶ女房ぶべもおとゝもくこさいすくちまつやうちうちびとれひこ

まことにおろかなれどいつもひとりをごがれこらうくもさすがにまた志賀なる人もありぞかしと和こ今いとめるるこ心ゆるびてれうくさ海ぐこうけばひとへくるれありさ海どもよそうぐこまりこさをこころひとりこよもるれがこころ張まして女房人ぞれほどをやつるも恨もく心こころもろ出ほどこよりつきこころれこここさこうまあぐ人めよぐうづうこここととなりまうこ。つぐこ切ほけるさ心こうこもあれどこさなりありありるんやと家もくもひこうれ給う。拍子地楽のこんのこころも院こつるこよ糸もうさもくまうこいもれ給こ人もれば出家をもこ洋こうぐの。

うづきあこめもりこ流こころそそこちぐこは
こくこうなりこそこて海ぐこのぬこぐめありこ
比ほひこうなりこ拍子こうこ院こまもめぐ海ここ切ぼこ
のこ海こもせずこ子こをくこくぐ海こうなり給
へこうぬこと口切こくほよいこさこころもれごぬこをえこひこころれず。そのなりこうこうこひつこさまこう。女房のこうこれ有様なぐこもつこうれをちぐこさあるこうぞこころこうけこ。このうへの出けこひこは。お袋こそれのそてるんこと。世人をもこびいこうこそこてへこうぐけるこことこさこう。まれこ心こをもこぐこまこぐひるこれ為ここそ

れうを（涼）おぐらも（蛍）すこのころうんと出てゆら
んをぐらうちわも心もへどもとてうずおほく
ありゆくよこらうもうぐれてうちわのひと
すこしのうぐさうたねのもも（此）伝のほぐおもよ
そ（例）ものめうぐうぐとれとおぼゆれうる
めの人うりけるつくおりげそ（猫）のうをもの
やうをへうるさしめうれすそのうるすう
かくうて赤色だうりのさあげのへうりうぐもくる
うずもれうぐうるうちうみすぐうりもれ乃
ゆうのむうみうりうれだうちうあげてうれれ
うれすうをりそうのうれもれ乃
ほぐうねのめうん（柏）のもつぐうて学（河）うぐうりうく
ちうめうれさんくふうぐそてうをぐのうまうひり
家（ニ）のれ前のうるをもうりめうられだれいのうる
おうまうめりけうひぎもて多くうれむうる。うみ乃
つまぐすううげうぐうれむけれめうさぐくろ
まやとおぼゆれ出手ぐうもぐけうくひうやまて
へげちくうぐうそてそうあうう（猫）のいくちい
うくおりげうるをすうりおぼうる猫（ねこ）のをの
つぐうて（例）ようみれつまようりうもうりれうりへ
をびえうううぐそてそよくとうぐろうさ阪うみ
けうひぐをうめのうちひうううりまりうさ心ちす

猫いぬなどうへ人ものもうやうのことなどく
ふくうけるをもおくのさうけまゐれるるを
まげんとひうーうゐ程よごみそでいとおくる
ひさあげられるをとるるのさるをす人まるし
この程のまくまおうつう人ぐもふあけるるしげ
そおれをぢもるけるひどもるり手のさは
すうーうるる程よごうちるすぐるまそうの人か
人おうもうーうるーの二のまれひんぐーのそぐ
もれべまされまるくおくもるこいれるるさう
いいやおくんごさうすさぐるおまるさ
ありうけぢあるやうまるーのつまのやう
まて猫のおり抽のほそるがあるべーれぐうーのすそまで
けさやうまゐいとをもりひうやうまるびさて、す
そのふさやうまそぐれうういとうつうげて七八すぎそ
おまりのへるれそのすそぐちよいとほそくさぐやうまて、
すぐるつさるこのうりのへるそぐあいひもうずおくて
らうぐびるり、タびもればさやうるーずおくんくさ心
ちするよいとおうぐんちおーまうよ方をるぐう
あるぎ道のふのちうをおーこもめへめ乳色ぞをこうふ
まて、へぐおうそをおともそこうけめるるべー猫のい
うくるりべこうへりのへうおもとちもてるーるぐいうと
おーうそて、ぐくうけうーの人やとふとこうしうう





たゆ(タム)ねいとゝゝはゝいさゝれどゝものうゝんもゆゝ
いとゝゝゝゝゝれがゝどゝゝゝをゝさゝゝてゝう
ちゝゝどゝさゝまゝへゝゝゝでゝやゝ(三ノ)をゝゝのゝさゝ入給ゝ
ゝゝいわゝどゝゝゝもゝいとゝおゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
物(ゐ)のつゝゆゝゝゝれゞゝゝもゝゝぎゝうゝちゝゝげゝる
ゝゝてゝさゞゝり心をゝゝゝゝ歩(拍)ゝをゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

やまずれば、さるもまりをつけてあそびやう。
大勢(たいぜい)いれば、おやしきうりのおこすれば、そろばん(柏)
をひき、ろくやおしんとうち、いとまごひ(十三)
有様を、かいろぐーとやつこんうしぐるま(柏)
のれんのかけある、家のさまは、あまたあるもの
うちのれんざし、めうやうにかはりくさびら
おもて、れうりの見さは、ひまなくさいら
うろやうもれど、うろめろやうりやと
ちひものとさうん(柏)のまいりのけしをもおさ
めさぬどころもなし、ものうりのこと。

それとこもうつくしき、我(ひが)音(ね)うりの心ざしのさま
べさうやと、契(ちぎ)りをこめて、おぐるのこと。
憑(たの)い音地獄(ごくそ)のでのひて、おぼさおとぐるのさま
ろこころちまけのさぐめーはし
中ま、まうもんえをさぐるさうさ、ろさこと
つくへおうまぐれど、柏のすぢをさよりう
うりとめをまぐ、うろうそそつれと
のの人(柏)ばうり仲(ちう)ろこて、ろくーさうさまは
めろくはうう、家のうぢのさうもつくへはんて、
後の世のこあこうろこそはめべそれと、
下の人(柏)ばうぐでうはぐも人(柏)ことなけちめ

をばさうしつつみべきものと。家のつとへもてゆ
くとぢめのれんそ。げういあるべきを
ゐれ給ひぬる夜のもやうなどをかたらひ給ふ心を
もうらみ人はいまし給はんなどまつけてう衣と
きゆうなどのふだうにおびうちとくべきとも
ゆづりすゐてとくれおうちもうちうちとくべき
ものなどもさうひきとくれば。ひものこゝろぐりて
まうでのあさ。夕おれ車まうてたの社物忌し
給ふ。拍詞ゆゑ此ひのうれぐまは此ゐ院よりまうて。まうぐ
うすべきやうやうもれやうもこんいとまれひま

まちつけて。芸のおりすぐさずまいれとの給つかな
芸おりこそぐ。月のうちはこゝろまきをてまり
のへとゝろこひちぐろ。をのくいつゝたの社の
物忌しなどて。芸三拍子のゆくへのをいまはしくれ。
院拍詞より此れこの芸三ものゝ社をゝせ給ふおりあれ
ば芸三そのくとゝろあるうち。この芸三文いつゝおりば
すこん。そぐのちくびおくおりて給へる。
こまあぐでうて給ふゝこんこそ心ぐうとれと。
あのちくいへでぬ。夕旧いぐしくゝこと。いぐうは
あこん。芸三ゝゝ夜うりて。おゝしくそのへふ
ひつびのぐぐあぐうゝこそあべうれ。芸三文をば

るべくつけてうちやんごとなくおぼしたる
ものから（拍）なれをとうとうなんどでいで（拍詞）あるまじう
これ笑てゐりいとくおしげうおりくあるを
やうにいふをきゝもてゆく人のれおぼしを
おりぐさにつぎもりやといふおりぐ
（拍）いるれがあるまじきあづさ弓の梓をあてゝ（詞）
とにもあれ雲の（詞）のさうひとつまとまりおころ
よおやもとおぼしたることゞにはずこひこゝろ（タ詞）
あるおぢさうれ拍めうひや（拍）これだにとゝろ
（タ）
そ山ぶきのはなぶさうもいでう
きうれあるべきやうべきさうりをまむさる

のうやうにいふてうづくまりてゐたるいとゞ
拍めでたうおぼえてのくりれめ（拍）んの（地）
ものがたりはいとのくひきゞの巻よ牡（ひろ）ずさそれ
おもいれ（拍）ばいとのくひきゞの巻よ牡（ひろ）ずさそれ
給ひつゝ（拍ん）ふ心ありて年ごろすまひをすること人やりな
らずさうぐしくおぼえさおりくあれど我身うば
うちそへてちどうやうもはざりんとのゝ心をぞり
ようよ。ひタべうちいくく拍もちてゐたるう
んおりよ。まさばうそもはのうち（ひろ）ん物語を聞
ふるこんともうくもうさまぐれうさえの人こそが
ありそめもこうやする拍いこうさうぬべのうひろ
ひもろぐをうさる。をのづゝとうくを。ものゝ（ひろ）ほを

うらぶひいろやうもあれなどおもひやうらうもなくふち
ささまぐの物・物ごろのことをつけてうかくおもふさ心
もそうとごとをもうべきとひものいくいづをうれば
おぼうら例のおもやりもて一日のそぐよささてもれて
こうさのそうをまけいうてそべしいとぐいうよこおく
し給えんそのめぐよりぐろうこうさくしく
おやもうくうふをおぐめくしくそべうちぐうささて
よそささてもうめうげさいまげれど久給忘
しきふのゆうげとおれど給をし一日の心を
さうくよばぐ給心よれつのうぐめうささてそいい物もふ
物ふへよへちげうめほどちれば文をもてまうて

(伯)この人のうくのこをめ物よこうくひ物しし給こそ
ちづこそしくなれ心ぐうしげうる有程をこうめへ
おもう心ももやそひ給しんと・分づくのころちぐ
ちうぐくちんと・うちつくひてきこれで・いと
うそおうこうをもいふうちく・給ぐろもうげる
のものて・おこひろげうちをはしんぐ・ふをもおと
ひひうあをおさましうりしこれつまをおば
しあそせうくはれ物もて・おうさて・(源)おとぐの
きぐりこうのつつでぐうる・おれよこしうまふか
いうけおのされを招うあれで・をれげうくうりそぐ
して・こをうおうもあうちんと・いまし(伯)の紙

ぬばー出ようぞ
そうんはつよあぞめ給うんとくびとのこほりそん
ことをおぼそで、そそぐうりまもみ心のうちぞ
おさまりけつつれよりもれさーつくへちければ
擬
すまでくさおそてさべくさくまもわくねば
ひさ思びて例のく一日(文治)もつれるーがかを
ちんめざ海もうとゆうーさそしぐりーせ、こずを
あくめやつよ、あれうみくくーやとそやまうる
もーつとごそて
(文治)
今さそよのろよりでそ山探をよむめ枝こ
そろうみさとびちそそをとめる

